女品

385
609

特209
449

加藤咄堂著

偉人の言葉

春潮社刊

昭和十三年・春潮社

はしがき

一、「偉人の言葉」は予がラヂオにて放送したる題名を踏襲したので、當時僅に菅原道眞、明惠上人、德川家康、西鄕南洲の四人なりしに更に十人を加へたるもの、これを總題として別に曾て「報國」に掲げたる「一人一言」より十七則を抽出し、併せて三十一、日々反省以て一月の料とす、婆說紛々、却て偉人の言葉を汚瀆するなき能はざるも、所謂兒を憐んで醜きを忘るゝ著者の婆心、請ふ咎むるなきを望む。

一、「一週の教訓」は大內青巒先生の週訓を予が曾て講解せるものにして「感興十二月」は四時風物に寓して其の心境を語るの閑文字。卷末に添へたる「朝思暮想」は予が壯時に於ける隨感隨想、これ卑人の言葉なりといへども、源は多く偉人の言葉より發して當時の感想に注ぐもの、老來これを讀んで紙魚を肥すに忍びず、卷末に付して存稿の一としたもの、幸に讀者と相觸るゝものあらば喜び之れに過ぎじ。

はしがき

一、經に曰く「朝念觀世音、暮念觀世音、念々從心起、念々不離心、――」と、朝に偉人を思ひ、暮に復た偉人を想ひ、念々相離れずんば日々の修養によし功なくとも亦過るなきに庶幾からんか。

戊寅初夏新綠翠滴る書窓の下

咄堂居士

偉人の言葉

目次

人に學べ……一
一、聖德太子……四
十七憲法……以和爲貴……和の一字治亂を一串す……國も家も
二、菅原道眞……九
菅家遺戒……神國の語……忠孝一本
三、平重盛……一五
和論語……朝恩第一……忠孝兩全
四、西行法師……一八
無我の境……和歌の第一義……文覺と西行
五、源頼朝……二三
頼朝の爲人……名利の誘惑……一寸の間……八幡太郎と鎭西八郎
六、明惠上人……三〇
明惠上人と北條泰時……あるべきやうわ……諸法實相……躬行示範
七、楠正成……三六
盡忠至誠……非理法權天……至誠を兵とす……楠氏の壁書と家訓書
八、武田信玄……四四

目　次

人は城……修養と箴言……好敵手上杉鎌信……五三
九、德川家康
啐啄同時……人生の重荷……五堪忍……裘婆の掟と壁書
一〇、貝原益軒……六二
庶民教育の泰斗……初めを忘るゝ勿れ……旅中の興趣
一一、松尾桃青……六八
一日是れ生涯……今日一日の事……一日の勵み……隨所主となる
一二、松平定信……七六
身命を賭す……十分の努力八分の生活……自在鍵の贊……樂翁の壁書
一三、二宮尊德……八四
經濟と道德……報德の訓……推讓の德……敎訓と道歌
一四、西鄕南洲……九三
平生の覺悟……活學問と死學問……南洲遺訓……勝海舟の名言
一人一訓……一〇一
太田道灌……一〇三
島津忠良……一〇五

北條早雲……一〇七
土屋東雨……一〇九
大內義隆……一一一
小督局……一一三
大鹽中齋……一一五
細井平洲……一一七
吉田松陰……一一九
池田光政……一二一
佐藤一齋……一二三
三浦梅園……一二五
山中幸盛……一二七
安東省庵……一二九
勝海舟……一三一
佛光國師……一三三
齋藤實……一三五
一週の敎訓……一三七
七曜のこと……七曜と修養……日曜（慈善）……月曜（規律）……火曜（忍耐）

目次

水曜（奮勵）……木曜（靜思）……金曜（知識）……土曜（教化）……結辭
感興十二月……一六五
觸目春光（一月）……一六七
心地の究明（二月）……一六八
花信（三月）……一六九
大聖の出現（四月）……一七〇
春を惜む（五月）……一七一
初夏の田園（六月）……一七二
水の一生（七月）……一七三
心頭の涼味（八月）……一七四
秋聲（九月）……一七五
燈下可親（十月）……一七六
菊花頌（十一月）……一七七
歳餘（十二月）……一七九
附錄
朝思暮想……一七九

偉人の言葉

加藤咄堂

人に學べ

人間の理想は神佛を模範とするにありますが、それは餘りに遠いので、唯だ其の及ばざるを喞つの外はありません。ソコデ修養の捷徑として擇ばるゝものは、最もそれに近い人を模範とすることであります。昔の人の語に「智、萬人に過ぐるを英といひ、千人に過ぐるを俊といひ、百人に過ぐるを豪といひ、十人に過ぐるを傑といふ」といふのがありますが、別段これを計る一定の標準があるのではなく、兎に角、凡俗を超越した偉人を指しますので、凡俗の仕事といふものは其の日〳〵に追はれて、其の日〳〵に消えて行き、長く

社會に記憶せらるゝものでもなく、其の影響する所も家族や友人の間に限らるゝものでありますが、偉人といはるゝ人々の事業は其の日〳〵に消えて行くものでなく、其の人死しても其の事は殘り、其の感化も亦僅に周圍の人に止らず、社會大衆に及ぼすものが多いので、其の最も偉大なるものに至つては天地と壽を等うし、宇宙と命を共にすると思はるゝものもあるのでありまして、三千年前の釋迦尚ほ生き〳〵として我等を教化し、二千年も昔の孔子や基督が尚ほ現代人を指導して居るのも亦其の偉大性を示して居るものであります。「彼も人なり、我も亦人なり、豈に及ばさらんや」と發奮する所に向上の一路は開かれるのでありますが、これら釋迦といひ、孔子といひ、基督といふ如きは稀世の聖者で、神と仰がれ、佛と崇められ、或は又大聖として全く別扱ひにせらるゝもので到底我等の及びもつかぬものとせらるゝならば、我等はモット手近い所に、亦多くの模範あるを認めざるを得ないのであります。

今茲に擧げまする各方面の偉人は遠い他國の人でなく、皆な我等と同じ日本の國に、我等に先きだちて教訓を遺された方々でありますから、相通ずるものある人々であります。

其の上代の人を少くして近代を多くしたのも亦其の我等に近きを求めたのであります。若しそれ、これらの人々を模範として自ら正うして人に接するならば自己を修養することは斷じて出來ない相談ではないと思ふのであります。

予年二十歳にして乃ち知る、匹夫も一國に繫るあるを。三十以後にして乃ち知る、天下にかかるあるを。四十以後にして乃ち知る、五世界に繫るあるを。

佐久間象山

一、聖徳太子

『和を以つて貴しと爲し、忤ふ無きを宗とす、人皆な黨あり。亦達者少し、是を以て或は君父に順はず、乍ち隣里に違ふ。然るに上和ぎ下睦みて、事を論ずるに諧へば、則ち事理自ら通じて何事か成らざらん。』

十七憲法

これは今から千三百有餘年前、即ち皇紀一千二百六十四年、推古天皇十二年に聖徳太子の定められました十七憲法の劈頭第一條の文句で、まことに國家存立の大本、社會協同の基礎を示された金誡といふべく、延いては我等が家庭生活に於てもその結合の土臺となるべき教訓であります。

以和爲貴

和は「やはらぐ」「かなふ」「ととのふ」「むつぶ」「あはす」等の義がありまして、其の字形から申しますと食へる草たるを示す禾と食ふ所の口とから成つて、食物は食物、口は口であるがその二つが相合ふやうに、おのおの守るべきを守つて、しかも相合ふので、社會には各種各様の仕事があるが、各人おのおの其の仕事を爲しつつ一致協同するが和で、一軒の家の内でいへば、親は親、子は子、夫は夫、婦は婦、兄は兄、弟は弟と、おのおの其の分を守りつつ一致して行くことで、この和に反對するを忤ふといひ、相背馳し、相爭うて一致しないの意でありますから、この忤ふといふことのないのを根本とせねばならぬので、宗といふ字はすべて分れたものの本原を意味するのであります。

和を以て貴しとするは、人間生活に於て最も必要なることでありますが、人間にはそれぞれ私情がありまして、自分の愛好するものとは一所になり、憎悪するものとは離反せん

とし、目前の利益になることには加擔し、目前の不利益になることには反對して、ここに自から黨派が出來て、一部分一部分に偏り全體の利害といふことを考へなくなるもので、この偏私の心を去り、全體を達觀し、目前の計途に驅られずして永遠の計を考へる達者といはれる人は少いものであるから私利私慾に執着して君父の仰せに順はず、地方感情や部落根性のために全體としての調和が出來なかつたり、自分勝手をのみ主張して隣近所との協同が妨げられたりするので、これを乍ち隣里に違ふと戒められたのであります。

和の一字治亂を一串す

人間の世の中は持ちつ持たれつで互に相和し相睦びてこそ平安の生活は營まれるので、他は持ちつでやれ、我れは持たれつで行くといふ得手勝手では互に相忤ひ相背きて相爭ふの外はありません。一部分一部分といふ小さい所に目を着けず、全體として持ちつ持たれつ相睦びて行かねば決して協同の生活の出來るものでないといふことを達觀し、上に立つものは下と相和し、下にあるものは上と相睦び、上下和睦し上意は下達し、下意は上達して行けば、大は一國の統治より、下は一家の和合までも完全に行はれて、どんな大事件でも、チャンと筋道が通つて一致協力して出來ないことはないのであります。「中庸」には「和は天下の達道なり」とあり、佐藤一齋の「言志錄」には「三軍、和せず以て戰ひをいひ難し、百官、和せず、以て治をいひ難し……和の一字、治亂を一串す」ともあつて、戰ひをするにしても、昔から「天の時は地の利に如かず、地の利は人の和に如かず」（孫子）とありますし、政治をいたしますにもこれ亦昔から「協恭、和衷なる哉」（書經）とあり、帝國憲法發布の御詔勅にも「和衷協同」と仰せられてゐるのであります。

國も家も

和の一字は人間生活の至寶、これを達成するには各人が私情を去つて全體に向ふ公の心を以て、互におもひやり合ふ同情の精神を以てせねばなりません。我が國が和國と呼ばれてその美を發揮せるも實に上は下を思し召したまひ、下は上を思ひ奉つて上下和睦し來つたので、國民も亦相和し相睦ぶことによつて藹然として一家の如く、温乎たる國容、萬

邦に冠絶するを得るのであります。されば其の國家の單位たるべき各人の家に於きましても、おの〳〵が我儘勝手を振り廻はしては決して和合の出來るものでありませんから、おれが〳〵といふ我見我性を卻けて互に思ひやり合ふ心を以て初めて此和合は出來るのでありまして國も家もたゞ此和の一字で圓滿なるを得るのであります。

此語を十七憲法の初めに掲げられたる聖德太子は御名を厩戸皇子と申し上げ、用明天皇の皇子にして推古天皇の皇太子として政を攝したまひ、盛んに大陸の文化を輸入して大に我が國文化の父と仰がれたまうたお方で、內には憲法を定めて國家の體制を整へらるると共に、外には毅然として我が國家の威容を示し、彼の「日出る處の天子、書を日沒する所の天子に致す」（隋書）の一書を以て矜驕一世を曠うする隋の煬帝を驚畏せしめたお方であります。

二、菅原道眞

『凡そ神國一世無窮の玄妙は、得て他國の窺ひ知る所にあらず。漢土三代周孔の聖經を學ぶといへども、革命の國風、深く思慮を加ふべきなり。』

菅家遺誡

日本は惟神の國であるが、そこへ大陸文化の入り込みましたのは、人皇十五代應神天皇の時の支那の儒教、人皇二十九代欽明天皇の時に印度に起つたる佛教が來たとするのが史家の通說で、或は其の以前からも、幾分傳へられて居つたであらうといふことでありますが、それが盛んに輸入せられましたのは聖德太子の時代からで、奈良朝から平安朝へかけ

て、殆んど大陸文化模倣の時代とまで目せらるるほどでありました。この滔々たる大陸文化輸入の時代に其の取捨の方途を明にし、我が神國の態度を明にせられたのは一代の鴻儒菅原道眞であります。

菅原道實は仁明天皇の承和十二年に生れ、幼より秀才にして詩賦に長じ、後、文章博士として令名を走せ、官にあつては德望一世に高く、終に累進して右大臣となり、藤原氏の讒に遇うて筑紫に謫せられ、忠誠の志を抱きながら配所に薨ぜられたのは普く世の知る所であり、後世天滿大自在神として仰がれたことも亦喋々を要せぬ所でありますが、ここに掲げたる一語は「菅家遺誡」として世に傳へられてゐるのであります。此書が菅公の筆に成つたか、否かは明かではありませんが、其の次ぎに「凡そ國學の要する所、古今に渉り、天人を究むといへども、自ら和魂漢才ならざるよりは、其の閫奥を闚ふ能はず」とありまして、菅公にして初めて云ひ得る語であると思ふのであります。和魂漢才の說として世に喧傳せられてゐるのであります。

神國の語

日本を神國と申しますのは、獨り我が日本人が自ら申すのではなく、早く新羅王が「吾聞く東方、神國あり、日本と稱す」（神功稱制前記）と申したと傳へられ、孝德天皇大化三年の詔には、「惟神に吾子治しめせよと言寄せたまひ」とあり、貞觀十一年伊勢大神宮告文にも「我が朝は神國」（三代實錄）とあり、北畠親房の「神皇正統記」には其の劈頭に「大日本は神國なり」と書き出したほどであります。卽ち日本が天照大神の神勅に基き一系連綿として天壤無窮に實祚を傳へたまふ玄妙なることは到底他國の窺ひ知ることの出來ない世界無比の國體であるから、漢土三代周孔の敎とて支那から傳へられた儒敎を學んでも、支那の國風たる革命のことは大に考へねばならぬといふ誡めであります。

和魂漢才

漢土といふは支那のこと、三代といふは支那古代の帝王政治たりし夏・殷・周、周孔と

は周公と孔子で支那の儒教の祖といはれる人々であるから儒教を學んでもといふほどの意に解釋してよいのであります。一體、支那の國家は日本と全く異りまして漢民族が黄河流域に集つて國を建てまする初から天子は天の命を受け天に代つて其の國を治めるもので、其の天の命は民意に現はれるものであるから、民意を得ることの出來ないものは天子たるの資格のないものといたしまして堯は之れを舜に讓り、舜は之れを禹に讓るといふやうに賢者を得てこれを讓るといふので所謂禪讓の風といふものがあり、禹の後は夏として子孫相繼ぎましたが桀王に至つて民心を失ひ、天の命を革めざるべからずとて殷の爲めに伐たれ十七主四百三十九年にして亡び、殷は湯王以來二十八主六百四十四年を經て紂王に至りて暴逆にして民心を失ひ、周の武王の爲めに亡ぼさるるといふやうに干戈を用ひて之れを討つを放伐といひ、禪讓放伐革命の國であつて、決して萬世一系に傳はる我が國體の如く神聖なるものでないから、支那の學問を學んでもこの國風を學んではならぬ。凡そ我が國の學問をするものは古今に渉り天のこと人のことをも究めねばならぬが、其の心の土臺たる魂を日本的に据ゑて、その心の働きたる才は支那學問を使ふといふやうでなければ、到底其の奥底を窺ふことは出來ぬぞよと遺誡せられたのであります。

この語は更に廣く現代的に、世界各國の學問を學ぶ上にも應用して考へねばならぬことで、日本の國體は萬邦無比で、何れの國に於ても此天壤無窮に寶祚を傳ふるの玄妙は存せないので、今日世界で威張つて居る國々も皆な盛衰興亡幾轉變建國以來金甌無缺といふことは出來ないのでありますから、此國體觀念を魂のどん底に据ゑて、それから世界の知識を應用する和魂漢才と轉じ來つてこの語は更に擴充せらるると思ふのであります。

忠孝一本

こゝに更に一言の加ふべきは此菅原道眞によつて忠孝一本の義が明かにせられたことであります。忠といひ、孝といふ其の字の支那から傳へられた如く、忠も孝も支那にある德目ではありますが、其の輕重に於て日本と支那とは大に相違がありますので、支那に於きましては何れかといへば孝の方を重しとし、これを百行の基とまで說いて居りますが、忠に至りましては寧ろ二の次ぎに置かれて親に對しては「三度諫めて聽かれずんば泣て之れ

に從ふ」とまで强要して居りますが、君に對しては「三たび諫めて聽かれずんば去る」と說いて身を退くのを安全の道として居ります。これは支那と日本と其の國柄が違ひまして、彼れは所謂革命の國風で、「君、君たらずんば臣以て臣たらず」とまでせらるゝのでありますが、我が國は萬世一系、君に忠なる所以は以て父母に孝なる所以で、忠孝は其の本を一にするのであります。されば菅原道眞に「資レ父事レ君の賦」に於て此事を明にし「君父の敎は同じかるべし、孝子の門には必らず忠臣あり、臣子の道何ぞ異らん」と示して支那傳來の忠孝思想をも日本的に解釋せられて居るのであります。此事は次ぎの平重盛の事例と參照して戴きたいのであります。

三、平重盛

『吾神明の敎の外、佛道儒道その他萬の道々習ひきくとも宗廟の御敎をたがへては露ばかりも習ふべからず、佛の敎は我れ敬ふといへども、吾神明の御心の外には出でず、敢て人の國に力をつけんよりはたゝにあれかしと思ふ』

和論語

これは平重盛の箴言として「和論語」といふ本に出て居るのであります。「和論語」は後鳥羽天皇の頃、清原良業といふ人が勅諚を蒙つて神託、歷代の聖訓並に公武の著名な人々の金言として傳ふべきものを編纂して觀覽に供したのを本とし、其の後代々清原家で

書き加へられたと傳へられて居りますので前掲の菅原道眞の遺誡と思ひ合せて我が國民の道とする所を示された語として之れを引用いたしました。世には重盛の著とも傳へらるゝ「五常内儀抄」なぞいふ物がありまして此人が神儒佛三道に通ぜられたことを示して居りますが、しかも其の中心を國家の宗廟たる神明の道に置かれたことは、其の行動によつても明かであります。

朝恩第一

平重盛の事は今更喋々を要しませんが、治承元年藤原成親等が兵を擧げて平氏を倒さんとし、事泄れて捕へられました時、父清盛は暴横にも其の事の後白河法皇に出ると爲し、兵を率ひて院參せんとする時、重盛が之れを諫めて

「法皇を傾け參らせんとの御計ひ方々然るべからず、重盛に於ては御供仕るべしとも存じ侍らず、父命を以て王命を辭せず、王命を以て父命を辭す、家事を以て王事を辭せず、王事を以て家事を辭すといふ本文あり」

と申しました。

忠孝兩全

更に

「悲しきかな、君の御爲に奉公の忠を致さんとすれば、迷廬八萬の頂より猶高き父の御恩忽に忘れなんとす。痛しき哉、不孝の罪を遁れんとすれば、又朝恩重疊の底極め難し、君の御爲に既に不忠の逆臣となるべし、君、君たらずといへども、臣以て臣たらずんばあらず。父、父たらずといへども、子以て子たらずんばあるべからずといへり、彼といひ此といひ進退こゝに谷れり、思ふに無益の次第なり、只末代に生を受けて係る憂目を見る重盛が果報の程こそ口惜しけれ、されば申し請くる處御承引なくして猶御院參あるべくば只今重盛が頸を召さるべく候」

と一句一涙、語は肺腑より出でゝ忠孝の至誠を盡くしました、此人にして此言あり、以て範とすべきであります。

四、西行法師

『武士の道は吾なくして武士になり、和歌の道は吾なくして和歌になり、萬の道我なき方に宿からでは、その道の達人とはいふべからず』

無我の境

我なくして武士になり、我なくして和歌になるといふ此無我の境ほど貴いはない、道元禪師も「佛法を學ぶといふは己れを學ぶなり、己れを學ぶといふは己れを忘るゝなり」といひ、蓮如上人も「佛法は無我にて候」といはれたと申すことであります。無我といふのはおれが〳〵といふ此五尺の身や五十年の生命に限られたる小さな我に囚はれず、天地と我と一枚になつて行くので、これを無我の大我とも申します。こゝでは武士と和歌に就いていはれましたが「萬の道、我なき方に宿からずば其の道の達人とはいふべからず」とあつて何事に限らず、其の道と我とが一つになつて、其の外に別に我といふものを置かないで、諸藝諸道こゝに到らねば決して達人とはいはれません。

西行法師、俗の名は佐藤義清（或はいふ憲清）といふ北面武士、勇敢にて弓馬の道に長じて居りましたが、移り行く世の無常を感じて、出家遁世の人となり、身を行雲流水に托し、吟咏自適して生涯を送つたのであります、其の心的修養は其の吟懐の次第に進み行くにても知ることが出來るので、其の出家の初め

なげけとて月やはものを思はする
　かこち顔なる我が涙かな

と咏じたる彼が後には

雲にたゞよひの月をまかせてん
　いとふとしても晴れぬものゆゑ

と達觀するに至りました。啻に和歌のみではありません。曾て東海道を下り、天龍川を渡ります時、舟人が法師を渡すは緣起惡しとて大に怒り罵り、さては打擲するに至りました、餘りの事に從僧が大に怒つてこれに報ひんといたしましたとき、西行は

「我れは佛法を修行して、其のために凌辱せられて死に到るとも憾む所はない。此心がないほどであるなら剃髮せぬ方がよい」

と申したといふことであります。これ我なくして僧となりしもの、或人が「富士見西行の圖」に贊して

見る人の心高さにくらぶれば
　低くさも低くし富士のしば山

といふたのも此西行の人格を賞贊したのに外ならないのであります。

和歌の第一義

世に和歌に關する西行法師の教訓として左の言が傳へられて居ります。

「我が歌をよむは尋常に異なり、花、子規、月、雪すべて萬物の興に向つても、凡そ所有皆な靈妙なること眼に遮り耳に滿てり、又よみ出す所の言句皆な眞言にあらずや、花をよめども實といふことなく、月を咏ずるも實に月も思はず、只此の如くして緣に隨ひ興に隨ひてよみ置く所なり、紅虹たなびけば虛空色どれるに似たり、白日かゞやけば虛空明なるに似たり、然れども虛空もと明なるものにもあらず、又色どれるものにもあらず、我また此虛空の如くなる心において、種々の風情を色どるといへども更に蹤跡なし。此歌卽ち如來の形體なり、されば一言よみ出でては、一體の佛像を造る思ひと爲し、一句を思ひよりては祕密の眞言を唱ふるに同じ、我れ此歌によりて法を得ることあり、もしこゝに至らずして濫りに此道を學ばゞ邪路に入るべし」

これを熟讀玩味いたしますと、諸道の玄妙も亦こゝにあるを感ぜざるを得ないので、彼れは天地は以て佛の顯現とし、一首の和歌を以て一體の佛像を作るに同じと見ました。何事をするにも此敬虔の念を以ていたしますれば、そこに我れと道と二ならざるの境地に進むことが出來るのであります。

文覺と西行

これも亦北面武士にして剛勇を以て稱せられたる遠藤盛遠の出家した文覺上人、これは出家の後も那智の瀧に荒行をしたり、院宣を奉じて賴朝を蹶起せしめたりした豪傑僧でありますので、同じ武士の出たる西行法師の和歌ばかり咏じて居るのを齒がゆしとして、我れ彼れに遇はゞ一擊してくれんと罵つて居りましたが、偶々西行が飄然として文覺の高雄の庵室へ訪れましたので、文覺の弟子達は何うなることかと存じて居りましたが、西行と文覺とは快く語り合ひまして別れて行きましたので、弟子は文覺に「あなたは常に一擊してくれんと仰せられて居りましたのに其の事のなかつたのは、どういふわけでありますか」と訊ねますと、文覺は容を正して「イヤ〳〵彼れの修行は到底我等の及ぶ所ではない。うつかりすると此方が打たれさうであつた」と申したといふ逸話が傳へられて居ります。

五、源　賴　朝

『大義を思はんものは、萬事を捨て此一事を思ふべし、萬事を捨つるといふ中に士たるものの耐え難きを能く耐え忍ぶは一の大義を能く思ふなり、能く此大義を思へば朝夕外の思ひ苦みはなきものなり、人此事よろづにあるべし、此境を能く辨へ知らぬものは取るに用なし』

賴朝の爲人

これも亦「和論語」に出て居る言葉であります。源賴朝は義朝の子で源氏の嫡流でありましたが、平氏榮えて源氏は衰へ、父義朝は尾張に伐たれ、賴朝も亦捕えられて伊豆に

流竄の身となりまして、幼き心に源氏再興の志を藏しながらも、此配所に忍苦の生活を送つて居りましたが、治承四年、源頼政の以仁王を奉じ檄を諸國の源氏に飛ばして平家追討を企つるや、頼朝も起つて應ぜんといたしましたが、源頼政は事成らずして破れましたので、少しく機を窺つて居りましたる時、文覺上人の院宣を奉じ來つて之れを勸むに遇ひ、蹶然起つて平家追討の旗を揚げ、其の間幾多の曲折はありましたが、終に連戰連勝して源氏の世となり、幕府を鎌倉に開き武家政治の基礎を固むるに至りました。此人の言として此語は更に味ふべきを思ふのであります。

此人の大義といふたのは、平家の追討であり、源氏の再興であり、否、それよりも大きい天下の平定であつたのでせう。世には頼朝が武家政治の創始者であるの故を以て叛逆者の如くにいふ人もありますが、當時天下亂れて麻の如く武力にあらずんば統一し難き狀勢にあつたことは、武家政治に好意を持たぬと思はるゝ北畠親房の「神皇正統記」に

「後白河の御時、兵革起りて姦臣世をみだり、天下の民ほと〳〵塗炭におちにき、頼朝、一臂をふるひて其の亂を平げたり、王室のふるきにかへるまでなかりしかど、九重の塵もをさまり、萬民の肩もやすまりぬ、（中略）頼朝、高官に上り、守護職をたまふ、これ皆な法皇の勅裁なり、私に盜めるにはあらず」

といふて居るのでも察せらるゝのであります、頼朝の決して大義を忘れた人でないことは俊乘坊重源が東大寺再建の依頼書に頼朝に對し「君の明力」と書てあるを咎めて君といふは一天萬乘の大君の外にはなきことぞと咎めたといふことが九條兼實の日記「玉葉」に出て居るのでも知らるゝのであります。しかし私はこゝに頼朝の辯護をしようといふのでもなく、又この格言を頼朝の身の上に就いてのみお話いたさうとするのではありません。

名利の誘惑

こゝに大義とあるのを一つの正しく志す所と見て考へますと、これを廣くわれ〳〵の處世の上にも見ることが出來ますので、人間何か一つ志す所があれば唯だ一筋に其の目的に向つて萬事を打ち捨てるがよい。あれもしようこれもしようと、とつおいつ思案に暮れては何事も出來るものではありません。一切を打ち捨ててそれに身も心も打ち込むといふこ

とが必要でありますが、此場合我れを誘惑して我が心を二三にいたさせますものは、恥と貧との二つであると申すので、これを反面から見ますると恥に忍び難いといふのは名を求めんとする心であり、貧に忍び難いとするのは利を得んとする心であります。名を得んとするが爲めに少しの屈辱に腹を立てゝ生涯の事を誤り、貧を逃れんとするが爲めに利に惑はされ、此名利の二慾の爲めに正しき道を踏み迷ふのでありますから、恥を忍び、貧に耐ゆるといふことは非常に困難でありますが、大きな志を抱くものは此困難に耐えて、尺蠖の屈するは伸びんが爲めで「韓信が股を潜るも時世と時節、踏まれた草にも花が咲く」と恥を忍び、古人が「財貧にして道いよ〳〵富む」といへるやうに心の富を蓄へて財の貧なるに忍んでこそ清節の人といはれるので「此事よろづにあるべし」といはれて居ります通り、何事をするにも、名利に惑はされず、其の志を大にして恥と貧とに耐え忍ぶといふことが肝要であります。

一寸の間

同じ賴朝の言葉に

「生るゝも一寸、死ぬるも一寸、善惡の間も又一寸、これを知るものは乾坤に自在を得るなり、よろづの事皆な〳〵一寸なることを知るべし」

とあります。こゝに一寸といふたのは僅かの間のことで、生といひ、死といふても實に束の間の區別、何をか喜び何をか悲まん。こゝに生死透脫の道はあるので、善と惡との境界も眞に一寸の差、門前一歩の方向は直に東西遠く隔つる本となる、此一寸を有効にすると無効にするとは生涯の損益に關するので、此格言は二つの意味からわれ〳〵に多大の教訓を與へます。卽ち一にはたゞ一寸と思ふが故に困苦にも耐え、艱難にも忍ぶことが出來ますし、又一には此一寸は獨立したる一寸でなく、無限に繫がつて居る一寸なりと思ふが故に一瞬の時刻も、一微塵の物をも疎末にしない修養ともなりますので、此理を能く考へ、此事を能く行へば何事にも自在の境地を得るものであります。

八幡太郎と鎭西八郎

賴朝を語りました因に、源家の武將として崇められて居ります八幡太郎義家と鎭西八郎爲朝との言葉を紹介して置きませう。義家いふ

「他の非を語るものは臆病第一のもの、十種の難あり、一には敵を欺く、二には詞多し、三には他の非を能くいふ、四には日夜のへだてなし、五には陣中不食なり、六にはもろ〳〵の勝負を好む、七には佛神の像を敬はず、八には主人朋輩に不禮なり、九には弓箭に疎し、十には兩眼うろつくものなり、勇者に十の德あり、一には敵を欺かず、二には詞少し、三には他の非を語らず、四には日夜へだてなく用心す、五には陣中不淨ならず、六には勝負事を好まず、七には佛神を能く敬ふ、八には人に禮儀ふかし、九には弓箭にたしなむ、十には眼小さく底に沈む、此十德は皇家武將の最上寶なり」

とこれが源家武士に影響したことなしとはいふことが出來ません、鎭西八郎爲朝も亦同じやうな教訓をいひ

「人のよからぬうしろ事をいふものは、必らず大臆病者のわざなり、たとへば武士の外たるものも此くの如くのものは出家は必らず不學破戒のもの、商人は末のなきものなり」

と、又以て處世の箴とすべきであります。

凡そ男夫は稼穡をつとめて、おのれも食し、人に與へて、飢えざらしめ、女子は紡績を事として、みづから衣、人をしても暖かならしむ、いやしきに似たれども、人倫の大本なり。

六、明惠上人

『人は阿留邊幾夜宇和といふ七文字を持つべきなり、僧は僧のあるべきやう、俗は俗のあるべきやう、臣は臣のあるべきやう、このあるべきやうに背く故に、一切惡しきなり』

明惠上人と北條泰時

源頼朝が鎌倉に幕府を開きまして干戈漸く收り、世はしばし太平を見まして源氏三代にして亡び北條氏が其の後を襲ひましたが、此時に日本の歴史中の不祥事といふべき承久の亂が起りまして北條義時が朝命に背き、其の子泰時をして京都へ上らしめたのであります。其の頃京都の西、栂尾に居られましたのが此明惠上人であります。上人は名を高辨と云ひ、紀伊の人で鎌倉時代の高僧であります。此上人が非常に此事を悲まれましたといふことは、上人が後に泰時に向つて「一朝の萬物は君の惠みを受けざるはない、君のお爲めなれば假令一命を召さるゝとも其の仰せに從ふべきに何事ぞ、兵力を以て京都に攻め上り宸襟を惱まし奉ること以ての外の義、其の惡逆無道、佛天の冥罰あるべきぞ」と詰責し、「强て君命に背かんとならば支那天竺にもお渡り候へ」といはれたのでも察することが出來るのであります。泰時は此上人の訓誡に深く感じまして、此上は如何にもして此世を安らけく治めんと、上人に其の道を尋ねますと上人は

「されば世の亂るゝ本は何ぞといへば、たゞ欲を本とせり、此慾心一切に遍くして一般の禍となるなり、これ天下の大病にあらずや、これを療せんと思ひたまはゞ、先づ此慾心を失ひたまへ、天下自ら令せずして治るべし」

と敎へられました、ソコデ泰時が自分一人が其の心になりましても、天下の禍根を斷つことは困難であると申しますと「其の身直しくして影曲れるものあらず、大守一人先づ其の心になりたまへば、萬人それに恥ぢて天下自ら治らん」と諄々として敎へ垂れられまし

た。我れ一人ではとか我れ一人位ではとか兎角人を責めて自ら省みなくては天下を正しくすることの出來るものではありません。自ら範を示すは政治家の要義であります。されば父義時が死にまして此泰時が代つて鎌倉幕府の執權職になりました時に、父の所領を弟達に過分に頒ち與へ、自分に少しく取りましたので、諸大名も之れに恥ぢて所領を爭ふものもなくなつて天下安らけく治りました、後年泰時は人に語つて「我れ不肖蒙昧の身を以て、辭するに理なく、政を執りて天下を治め得たのは全く明惠上人のおかげである」と申したといふことであります。

あるべきようわ

此無慾にして世に處す道如何となれば「あるべきやうわ」の七字を守ることが肝要であります。僧は僧であるべきやう、俗は俗であるべきやう、乃至君は君であるべきやう、臣は臣であるべきやう、親は親であるべきやう、子は子であるべきやう、兄は兄であるべきやう、弟は弟であるべきやう、夫は夫であるべきやう、妻は妻であるべきやうであります。すれば一家圓滿、天下太平であるのに、此あるべきやうを忘れ、柱も木、梁も木ぢや、同じ木であるのに柱は何の義務あつて年中立通し、梁は何の權利あつて年中横になつて居ると、安りに平等論を振り廻して、柱が横になり、梁が立てば家は潰れるので、矢張り柱は柱であるべきやう、梁は梁であるべきやうでなければ家は保たれぬのであります。親も子も男も女も同じ人間ぢやないかと自分といふものを中心にして此あるべきやうわを忘れては國も家も立ち行くべきものではありません。

諸法實相

佛敎では「諸法皆是因緣生」と申しまして、天地間の萬物は悉く主要原因たる因と、之れを助けて結果を生ぜしむる緣とのかけ合せで、同じ木であつても緣が異れば柱ともなれば梁ともなり、同じガラスでもコツプともなれば水瓶ともなる、同じく人間であつても遺傳や境遇によつて彼れともなれば我れともなるので、既に此因緣によつて差別を生じた以上、其の差別を守つてコツプはコツプであるべきやう、水瓶は水瓶であるべきやうになつ

てゆくのが宇宙の當相、人間も亦此理を守つて我れが〳〵を振り廻はさず、分を守つて此あるべきやうわで行かねばならぬので、たつた七字でありますが此教訓は一切に行き亘つて居るのであります。

躬行示範

上人はたゞ之れを口に唱へられただけでなく、又身を以て範を示されたので、北條泰時が大に上人に歸依して丹波の國の大きな地所を寄進せんと申し越しました時、

「かゝる寺に、所領だにも候へば、住する僧共、何と懶墮懈怠に振舞ふとも、所領あれば僧の食事事缺けまじ、衣裝も補ぬべしなんど思ひて、無道心なる者ども籠り居て彌よ不當にのみ成り行き候べし」

というてこれを辭退せられましたし、人の多くの布施物を以て祈禱を請ひまするに對し

「我は朝夕一切衆生の爲めに祈念を致し候へば、定めて御事も、其の數の中にてましまし候らん、別して祈申べきに非ず。叶ふべき事にて候はゞ叶ひ候はんずらん。又叶ふ間敷事にて候はゞ、佛の御力も及ぶまじき事にて候らん」

と申されたのであります。これこそ僧は僧であるべきやうわの本文を守られたのであると申すべきであります。

蒼々の中に何となしにおそるべき道あるを知りて、常々に身をつゝしみて法を守りて、天命に、たがはざるやうにする、これを天を畏れるといふ。

七、楠　正　成

身のために國を思へば二た心
君のためには身をも思はじ

盡忠至誠

大楠公の誠忠無二の偉人であることは今更私の喋々を待たないのでありますが、此和歌ほど能く楠公の御心を現はしたものはないと思ふのであります。人間といふものは卑しいものでは口では偉さうなことをいひましても利益に就くのが人心で、源氏が天下の將士の心を捉へましたのも平氏を倒して得た所の領地を味方の將士に頒ち與へ、北條氏が將士の心を捉へましたのも承久の亂で得ました京方の所領も之れを私するなくして多く味方に與へましたからでありましたが、蒙古の來寇に對しましては之れを擊退いたしましたが、何にも得る所がなかつたので充分に其の爲めに働いた諸大名を賞與することが出來ず、加ふるに苛斂誅求に惱むといふことで諸侯の心も人民の心も北條氏を離れんといたして居りましたのに尙ほ北條高時が暴威を振ひましたので、こゝに後醍醐天皇の北條氏討伐となり、建武の中興は成就いたしましたが、もとゝ此中興は公家天下に復するといふ思想が一部にありましたがため、其の討伐せられたる北條方の多くの所領は公家の方に多く頒與せられまして、武家の方へは多く渡りませんので、武家の世の中であつたなら、かうはなるまいと不平を抱くものをも生じまして、此中興は成功いたしませんで武家の棟梁として足利尊氏を推し、これに勢力を得せしむるに至りましたので、「身のために君を思ふ」ものは多かつたが「君のために身をも思はじ」と自己の名利を振りすてゝ一意君を思ふ大楠公の如き人は少く、終に南風競はざるに至らしめたのであります。

身のために君を思ふは、有我の心であつて未だ本當の忠とは申されぬので「君のために身をも思はじ」といふ無我になつて、こゝに先きの西行の言葉にもある我を忘れて其の道

と一なる盡忠至誠を發露することが出來るのであります。其の初め笠置山に召さるゝや、「合戰のならひにて候へば一旦の勝負をば必らずしも御覽ぜらるべからず、如何に戰ひ敗るとも、正成一人生きてありと聞こし召され候へば、聖運遂に開かるべしと思召させ候へ」と一身を君に捧げ、これを以て終始し

身のために君を思へば二た心
君のためには身をも思はじ

の和歌を實現せられた行實は、まことに「正直にして邪欲なく、義を守り死を厭はぬ上士」の風格を體現せられたので、よし此語は楠公の直接、口にせられたのではないとしても、楠公がこれを身に示されたことは疑ひないのであります。

義を守り死を厭はぬは士人の操守で、「義は山嶽より重く死は鴻毛より輕しと覺悟せよ」は軍人に下したまはつたる御勅諭にも仰せられたる聖訓でありまして楠公は實にそれを身に示されたので、勤王の大義のためには一命なぞは鳥の毛より輕く感ぜられたのであります。特に楠公に於て吾人の心を打たるものは、其の忠節の自分一代に止らず、其の死に當りて「七たび人間に生れて朝敵を亡ぼさん」と誓はれ、其の子正行を諭さるる言にも、「汝謹みて禍福を計較し、利に從ひ義を忘れて、以て乃父の忠を廢する勿れ、苟くも我が族隷にして一人の存するものあらば、則ち率ゐて以て金剛山の舊址を守り、身を以て國に殉じ、死あつて他あること勿れ、汝の吾に報ずるもの之れより大なるはなし」（大日本史）とある如き到底他に其の比を見る能はざる盡忠報國の精神を親ふべきであります。

非理法權天

世に楠公の旗印として、非理法權天の五字が書かれたと傳へられて居ります、此語味は「非は理に勝たず、理は法に勝たず、法は權に勝たず、權は天に勝たず」との意味であると解されて居ります。成程道理に適はない非理窟、非論理は道理に勝つことの出來るものではありません。しかし如何なる非理窟、非論理でありましても、それが法として定められ、これが天下の掟となりましては、いやでもこれに背くことは出來ません。よし其の法の改廢は迫ることは出來ましても、其の法として存する限りは致方はないのであります。

しかし昔は權力ある者は其の法を蹂躙することも出來たのですから法も權に勝たずといふたのでありませうが、それでなくとも之れの改廢は多數の權力によつて出來ないことはありません。しかしどんな權力を以てしましても天に勝つことは出來ません。時に無理が通つて道理が引込み、權威の法制を壓することがありましても、それは皆な一時的で永久の勝利ではありません、世に最も強きものは天の理であり、法であり、權であります。しかも天は昭々として我等を照らす。人を相手とせずして天を相手とする此心こそ最も大切なものであります。

至善を兵とす

楠公、曾て南都に遊びました時に、或る僧と道伴になつて物語られた時、其の僧に對して「道を以て軍に勝つ法如何」と問はれた時、其の僧は「至善を兵とす」と答へたのを深く心に銘じそれより兵を用ふる自在、機に應じて無礙なるを得られたと傳へられて居ります。至善は「大學」に「至善に止るにあり」とありまして至誠の迸り出たのであります。

此心を以て兵を用ふるが楠公の兵法で、結局する所、天を相手にする「まごころ」から出るに外ならぬのであります。この僧の何人なりしやは明かでありませんが、「延寶傳燈錄」には「關山和尙、南都に遊屐し、途次楠正成と偶會して立談す、正成、私第に迎へて歡待七日、仔細に參禪す」とありますから、恐らくは關山國師であつたらうと推測せられます。若し關山國師であるといたしますれば、南朝の帝師と仰がれたお方で、或る時人が生死に就て如何に覺悟すべきやを問ひました時、言下に「我が這裏生死なし、たゞ義あるのみと行動せられたことを大德であります。楠公が實に我が這裏生死なし」と喝破せられた思ひますれば、楠公が死生の問題に透脫し、事あるに當つて動ぜざる心要を養はれて居つたことを想見することが出來ます。

楠氏の壁書と家訓

楠公の語として「和論語」に「凡そ士は其の身正直にして邪欲なく、義を守り上を敬ひ下を惠み、言語によこしまなく、常に事あるに動ぜざるは上士なり」とあり、又「楠公の

壁書」として多くの教訓が傳へられて居りますものゝ中に

禮あつくして人の非を咎むるな
人の事いはんより我が非を顧みよ
立身を思はんより主恩を忘るな
忠を安んじて死を恐るるな
我が命、主親のもの、私に捨るな
慈悲はするとも、代りをとるな
物いへば聞えるやうに
物書けば讀めるやうに

といふやうな些末なことにまで注意があり其の「楠氏家訓」といふものの中には

善事を爲すを思はんより惡事を爲すな
雞鳴に起きざれば日暮に侮あり
節儉質素は保城の如し
華美慢心は仇讐の如し
己が身を思うて人を害ふな
人を知り己れを知りて業强し
遊蕩に過ぐれば財貧し
謙遜のものには幸福來る
不遜のものには災害來る

等、一句一句が日々の反省となるものが多いので、これらも後人が楠公に假托して造つたものでないとはいへぬが、訓言として守るべきに於ては差支はないと思ふのであります。

大君の任のまにまにひとすぢに仕へまつらむ命死ぬまで

八、武田信玄

『人は大小に依らず、身を全ふする策一あり、仕度き事をなさずして嫌なことをなすにあり』

人は城

戰國時代の武將は多くの士卒を率ゐて生死の巷に出入し、權謀術數少しの油斷も出來ない周圍の敵味方に對して行かねばならぬものでありますから、其の訓誡として遺された言葉には人心の機微を穿つものが少くありません。其の一人としてこゝに擧げました武田信玄は甲斐源氏の嫡流大永元年を以て生れ、幼名を勝千代、元服して晴信といひ、後入道して信玄と申しましたので、甲斐に居りまして越後の上杉謙信と相對して武將の双璧といはれ、武將中の武將と崇められましたので、特にこの信玄の兵法、軍略に秀で、後世甲州流又は武田流の兵法として傳へられたほどでありますが、又頗る民政に心を用ひられましたので、賴山陽の「日本外史」には「昔吾が父嘗て行て甲斐を過ぐ、甲斐の民飲食必らず館君を稱す、館君は信玄なり、信玄の悖逆を以て而して能く强敵に抗する數十年、而して相下らず、豈に其の民を敎ふる素あるを以てにあらずや」と申して居りますほどで民心一にこれに歸し、甲斐一國は恰も城の如く能く敵をして入るなからしめたので、世に信玄の歌として

人は城、人は石垣、人は堀
　なさけは味方、あだは敵なり

と申すのが傳へられて居ります。如何に堅い城を築き、深い堀を掘り、丈夫な石垣を造りましても、人心を失ひましては內から破れて行くのですが、人心を得てさへ居りますれば其の一致團結の力は能く强敵をも防ぐことが出來るのであります。卽ち「天の時は地の利に如かず、地の利は人の和に如かず」で和協の力ほど手堅いものはありません。然らば其

の和協の道は如何と申しますれば、互に思ひやりあふ同情によつて結ぶの外はありません。この同情即ちなさけ心は味方となるものであり、之れに反して人を憎み人を怨む心は敵となるものであります。これは何にも兵法軍略の上のみでなく、われ〳〵の日常生活の上にも「なさけは他のためならず」で自分の味方となるものであり、「人を咀はゞ穴二つ」で人を憎めば又自分も憎まれ、人のためにならぬことを計れば自分のためにもならぬものであります。

修養と箴言

此武田信玄は武略ばかりの人ではありません。精神的方面の修養もおさ〳〵怠りなかつたので、九歳の時から長善寺といふ寺に入つて修學し、小幡入道日淨に就いて兵書並に武藝を學びましたので、長じては彼の有名な快川紹喜禪師を甲斐國慧林寺に招請して教を受け、機山と號したので、此禪師が信玄死後武田家滅亡の時、織田信長のために寺を燒かれ、泰然として「安禪は必らずしも山水を須ひず、心頭滅却すれば火も亦涼し」と火炎中に入寂せられたお方であります。信玄の其の修養は彼の「家法」の中にも現はれて

一、參禪嗜むべき事、語に曰く、參禪は別に祕訣なし、唯だ生死の切なるを思ふと。

一、佛神を信ずべき事、曰ふ、佛心に叶へば則ち時々力を添へ、横心を以て人に勝てば則ち露はれて亡ぶべし。傳に云ふ、神は非禮を享けずと。

一、家中の郎徒に對して慈悲肝要の事、三略に曰く、「民を使ふこと四支の如し」と。

とあるにても知ることが出來ます。こゝに擧げました言葉も亦これらの修養中に得ましたもので、人間といふものは自分の仕度いことばかりやつて身を全ふすることの出來るものではない。嫌なことをしてこそ身を全ふすることが出來ると申しますので、一體人間は自分の仕度いことを先きにし、嫌なことは後へ〳〵と延ばす癖があります。延ばしたからとてどうせ爲なければならぬことでありますから、寧ろ嫌なことを先きにすれば、「烟くともあとは寢やすき蚊遣かな」で、其の事をやつてしまへば、後へのこるのは自分の仕度いことでありますから樂々と身を保てるのでありますが、これを後へ延ばすものでありますから延ばし延ばして、ついにのつぴきならぬ窮處にまで立ち至つて終に身を亡ぼすに至る

ものであります。古人の語にも

「事を決するは癰を斷つが如し、多少の痛苦は忍ばざるべからず」

とありまして、事をきめて行くのは癰といふ腫物を切開するやうなもので、これを切開するのは嫌なことでありますから、延ばし〳〵て居りましては其の内に毒が全身に廻つて終に治し難きに至るものでありますが、痛いのを辛抱して切開してしまへば所謂「雷雨一過して山更に青し」といはれるやうに、後はすが〳〵しくなるものであります。一事が萬事で人間の世渡りも仕度いと思ふものばかりをやつて行きましては嫌なことが積り積つて如何とも爲し難きに至るもので、信玄のこの「仕度きことをなさずして、嫌なことをなすにあり」といひましたのは、能く人生を見た言葉と思はれるのであります。信玄の人生觀は彼の和歌に

誰れも見よ滿つればやがてかく月の
十六夜の空や人の世の中

で滿つれば虧くるといふことを常に留意して仕度いことをなさず、嫌なことをなす所に保身の道ありとしたのであります。其の他信玄の箴言として面白きは

「盲人の谷に墜ることはさのみなし、目明の人却つて能く谷に墜つ」

で盲人は自らの不自由を知つて居るから一歩々々注意して歩くから谷から墜つるといふこともないが、目明きは自由に任せて危險の道をも大丈夫と進み行く中に、少しの油斷が大怪我の本となつて、谷に墜つることも少くない。才なきものゝ平穩に世を渡り、才人の才に任して失敗落魄するのも此類で、こゝに充分なる注意を要するのであります。

好敵手上杉謙信

甲斐の信玄を語つて逸することの出來ないのは越後の謙信であります。謙信は信玄より十歳の年少で、享祿三年に生れ、幼名は虎千代、長じて景虎といひ、謙信は入道後の名であります。其の幼時寺に入りて教を受けたのは信玄と頗る相似て居るのであり、後、武略を以て立つたのも相似て居るのであり、其の益翁宗謙禪師に就いて參禪したのも亦相似て居るのであります。彼れ達摩不識の公案に於て悟る所あり、不識庵と號して信玄の機山に

對しました。此謙信と信玄との合戰は有名な川中島合戰で、此時に謙信の其の臣増尾兼秀に申しました言葉は武士の精神を示したものといふべきであります。

「生を必する者は死し、死を必する者は生く。要はたゞ心志の如何に在り。能く此の心を得て守持する所堅ければ、火に入りて燒けず、水に陷つて溺れず、何ぞ生死に關せんや。予常に此の理を明かにして三昧に入れり。生を惜み死を厭ふ如きは未だ武士の心膽にあらず」

と、彼れは生死を眼中に置かずして戰場に臨んだので、其の辭世として傳へられる

一期榮花一盃酒　四十九年一睡夢
生不レ知死亦不レ知　歳月只是如二夢中一

と傳へ、又辭世歌として

極樂も地獄も共に有明の
月ぞこゝろにかゝる雲なき

とあるにても死生に超脱せることは窺はれるのであります。世には謙信の遺著として「日用修身養」なるものを傳へ、其の中に

一、朝は早く起き申すべき事、付たり手水早く仕るべき事。
一、食物は何によらず、差合ありと言ひ傳へたる物食ふは、心拙き振舞なれば、必ず忌むべし、若し食事に付き命を失はゞ、忠孝二道に背き、世間の誹謗に預り、一方ならぬ恥なり。能々禁ずべし、慎むべし。
一、大酒呑むべからず、たとひ醉はずとも酒強く呑めば、脇より危く見ゆるものなり、且は五臟の病となるものなり。
一、大食は卑劣の至り、尤も五臟の病となるものなり、總じて食物は何れによらず家來と共に食する事ならば食ふべし、獨味の振舞、尤も卑劣の至りなり。

といふ如く微細に亘つた注意が擧げられて、其の武將の心掛けを窺ふべきものが少くないのであります。

九、德川家康

『人の一生は重荷を負うて遠き道を行くが如し、急ぐべからず
不自由を常と思へば不足なし、心に望み起らば、困窮したる時を
思ひ出すべし、堪忍は無事長久の基、怒りは敵と思へ、勝つことば
かり知つて、敗くることを知らざれば、害、其の身に至る、おのれを
責めて、人を責めるな、及ばざるは過ぎたるに優れり』

啐啄同時

これは德川家康の遺訓として頗る人口に膾炙して居る格言で、これを家康の一生と思ひ合せて見ると、頗る興味の深きを感ずるのであります、家康の前半生は決して幸福なものではなく、幼にして駿河の今川氏へ人質となつて送られて居たほどで、辛酸具さに嘗め、其の後、三河の岡崎に歸りました後は織田氏に屬し、武田氏などに苦しめられ、生涯數度の戰ひも多くは逆境であつたのでありますが、隱忍持久、終に時節到來して征夷大將軍となり德川三百年の基礎を築いたので、まことに重き荷を負うて遠き道を行くが如く、急がずして其の功を收めたので、或る人が織田信長、豐臣秀吉、德川家康の三傑の風格を俳句に作つて、織田信長は「鳴かぬなら殺してしまへ杜宇」といふほど短慮であるが、豐臣秀吉は「鳴かぬなら鳴かして見せう杜宇」といふほどの決意を以て進み、家康は「鳴かぬなら鳴くまで待たう杜宇」と堅忍持久の精神を持つて居つたと評したのは面白い比喩であると思ひます。

これに就て面白き逸話が傳へられて居ります。永祿七年十二月に、武田信玄が德川家康の英名を聞き、家人下條彈正をして家康の家來酒井忠次に書面を送らしめて、兩家これより懇親を結ばんと述べられた其の書面の表に啐啄といふ二字が書いてあつて、誰れも其の意味を解することが出來なかつたが、丁度其の時、伊勢の僧、江南和尚といふのが岡崎の

城下を過ぎて東國に下られると聞き、これを質しますと、和尚は「これは萬事に時節を失はざるを肝要とする義で、鳥の卵の殼を喙き破るに自ら時節があつて、早ければ水になり、遲ければ腐るといふたのだ」と教へられたのを徳川家康は「これまことに主將たるもの意を用ふべき所である」と感じたといふことがあります。徳川家康は其の時節を待ち得て成就したので、決して功を急いで成るものではないのであります。

人生の重荷

「人の一生は重荷を負うて遠き道を行くが如し」とあります。此人生の重荷とは何でありませうか、名譽を得んとし、又失ふまじとするのも一つの重荷でありますし、利益を得たい〳〵と齷齪するのも、之れを失ふまじと苦慮するのも亦一つの重荷であり、若い人には其の外に戀の重荷といふのもありませう。しかし名譽や利益や戀やは此重荷を取り下ろしたからとて生きて行くのに差支はありませんが、どうしても取り下ろすことの出來ない人生の重荷は、生きて行くといふことであります。此生きて行くに就いては食はねばならぬ。食ふに就いては働かねばならぬ。此働くといふことは並大抵のことでないので、働いて食ふといふ生活の重荷は何人も負はねばならぬので、此重荷を負うて、さて何處へ行くのでありませう。我等は生きんが爲めに食ひ、食はんが爲めに働いて居りますが、日々進み行く所は、生への道か死への道かと問ひますれば、何人も生へ後戻りするはなく、時々刻々死へと進み行くのであります。食つても死ぬ、食はなくとも死ぬ、一體人は何んのために生きて居るのであらう。「何の爲めかは知らないが、生きた序でに死ぬまで、どうか、かうか生きて居ればよい」といふ人がありますが、それでは人間と他の動物とは何の異る所はないので、犬でも猫でも牛でも馬でも皆な生れた序でに死ぬまで、どうか、かうか生きて居ります。人間の他の動物と異る所は彼等の如く自然のまゝに與へられたる生きんとする本能にまかし、死ぬまで生きるのではなく、此自然を利用して生活價値を向上すべく「かうありたい」（情）と望むと共に「かうあるべき筈だ」（智）と考へ、「かうあり得る」（意）と智情意の三方面より眞善美の理想への實現を計つて文化を創造して參りましたので、他の動物の昔のまゝにして何の文化なく、文明なきに對し人類のみ進歩發達して參り

ました所に萬物の靈長たる人間の特色はあるのであります。

生れた動物は皆な死にますやうに、生れた人は皆な死にますが、此生れて死ぬまでの間に仕遺して置いてくれた文化文明は次ぎから次ぎへと傳つて現代に至りましたので、今日のわれ〳〵の生活の利便は皆なわれ〳〵より以前の人々の發明發見を傳へ來つたに外ならないのでありますから、我等も亦これをより善くし、より完全にして來るべき次ぎの時代の人々へと傳へる大きな重荷を帶びて居りますので、此遠き〳〵理想を目標として進み行く人生の大道、決して急いだからとて行けるものではありません。私は常に此事を喩へまして人生の行路は丁度一歩々々歩を運ぶが如しと申して居ります。即ち一方の足でヂツト大地を踏み占むると共に他の一方の足を出し相互に止めては出し、出しては止めて行くべきで大急ぎに兩方を一時に出さんとして「一躍青雲の志を貫く」とか「一攫千金を計る」とか致しましても、それは顚倒の外はないのであります。されば兩方の足を止めて居つては進むことが出來ず、其の間に他の人々は進みまして、全く人生の落伍者となるのでありますから、足は出さねばならぬが「急いては事を仕損ずる」で「急ぐべからず」と訓誡せられたのであります。

五堪忍

次ぎに「不自由を常と思へば不足なし」で、有限の世の中に無限の理想へとあこがれて居るのが人間でありますから、其の欲求のまゝに「ああしたい」「かうしたい」と自由を望めば不平滿々で心の安まることはないのでまことに思ふに任せぬが人の世の中で、思ふに任せるのは我が心でありますから此方で辛抱すれば辛抱の出來ぬことはないので、「若し心に望み起らば困窮したる時を思ひ出すべし」で、「堪忍は無事長久の基」、これに就ては柳澤淇園の「雲萍雜志」に五堪忍の說といふのがあつて、能く其の意味を述べて居りますから、ここに引用して講解に代へることにいたします。

「五堪忍といへることあり、聖賢の旨趣よりいでて、世業をなすの基、人間安穩の大悟にして、修身齊家の樞機なり、是を守る時は、勞する事なくして家富み榮え、是を守らざるときは亡ぶ、衣服は何の爲にか着る、寒さを凌ぎ暑さをいとはんが爲なり、さあら

ば寒からず着、暑からず着ば、粗服にても厭ふことあるべからず、美服に奢るは未だ寒暑の身にしみざるが故なり。寒暑の身にしみなば蕨裸にてもいとふものあるべからず。食事は何の爲にかする。空腹をやめん爲なり。さあらば添物はなくてもありなん、添物なくて食の進まざるは、いまだ飢の至らざるなり、飢る時は糟糠をだもきらはず、家は何の爲にか造れる。雨露をばいとはんが爲なり。さあらば無益の造作など、なくてありなん、水火の災に家を失はば、人の軒端にてもいとふ者あるべからず。妻は何の爲にか持てる、子孫を嗣がん爲なり、さあらば子孫ある者は妾など持たであるべし、妻子あるが上に妾を持つは、色におぼるるが故なり。財は何の爲にか求むる、世計の第一、衣食を足らしめんが爲なり、さあらば義をかき恥をもわすれて、貪り貯ふるにも及ぶまじきことにこそ」

これも亦一個の訓言として味ふべきであります。

「怒りは敵と思へ」といひ、「勝つことばかり知つて、負くることを知らざれば害、其の身に及ぶ」といふは別段講解するまでもなく讀んで字の如きの教訓であります。其の次ぎに、「おのれを責めて人を責むるな」とあるも亦明かな修養の訓言でありますが、兎角、人の眼は外を見るのは明で、内を見るのに暗く、他人の短所はよく氣が付いてこれを責めますが、自分の場合は疎かになるものでありますから、自分には充分に反省して、他人に對しては寛容の德を以てせよといふので、「及ばざるは過ぎたるに優れり」とあるのは、理想をいへば「過不及なし」で過ぎたることもなく、及ばざることもないのですが、なかなかさうは參りませんから、「物事は八分目」で過ぎたよりは及ばぬ方がよいと敎へたのであります。

娑婆の掟と壁書

德川家康の人の一生を行路に喩へたのと共に想ひ起さるゝのは、こゝに掲げました德川光圀の言葉であります。光圀は水戸の藩賴房の三男で家康の孫に當り、德川時代の名君として、又夙に尊王の大義を抱き「大日本史」を編纂して我が國體を明にせられた偉人であることは申すまでもありません。此光圀の座右の銘ともいはれましたこれは人の一生は他

家へ客に赴いたやうなものであるとして、左の如く教へて居ります。

「此の世は客に來りたるなれば義理あるべし、心に適ひたる食事に向ひては、善き御馳走に逢ふと思ひ、心に適はぬとても、客なれば譽めて食はねばならず、夏の暑さにも、客なればたしなまねばならず、冬の寒さにも、客なれば堪えねばならず、腹立つことも、客なれば堪忍せねばならず、ちいさき家なれども、客なればふしやうして居らねばならず、衣服きたなしとも、客なれば堪忍せねばならず、親子兄弟召つかふ小者に至るまでも、客なれば挨拶よく暮し、跡に心を殘さず御暇申すがよし」

父母によばれてかりに客に來て
こゝろのこさず歸るふるさと

家康の教訓と一脈相通ずるものあるを見るのであります。尙ほ世に此光圀の壁書なるものが傳へられて居りますから、こゝに紹介してをきます。

一、苦はたのしみのたね、樂は苦の種と知るべし。
一、主人と親とは無理なるものと思へ、下人はたらぬものと知るべし。
一、子ほど親を思へ、子なきものは身にたくらべるちかき手本としるべし。
一、おきてにおぢよ、火におぢよ、分別なきものにおぢよ、恩を忘るゝ事なかれ。
一、欲と色と酒とをかたきと知るべし。
一、朝寢すべからず、咄の長座すべからず。
一、小なる事は分別せよ、大きなる事は驚くべからず。
一、九分はたらず、十分はこぼるると知るべし。
一、分別は堪忍にありとしるべし。

右九ケ條

むかし蒔く木の實大木となりにけり
今まく木の實のちの大木ぞ

一〇、貝原益軒

『衆人富に居て多く貧を忘る、須らく節儉にして奢侈なかるべし、貴きに居て多く故舊を忘る、當に存卹して疎んぜざるべし、歳長じて多く父母を忘る、宜しく身を終るまで思慕すべし、病愈えて多く愼みを忘る、須らく安樂にして常に病苦の時を思ふべし凡て自ら修むる者は、當に初を忘るゝを以て誡となすべし』

庶民教育の泰斗

徳川家康が盛んに文教を起しましてから、中世僧侶階級にのみ保たれて居りました學問熱は武士階級にまで及びまして、其の研究頗る盛んとはなりましたが、未だ庶民階級には行き亘りませなかつたのを通俗と平易とを旨とし、庶民教育へと目を注ぎて多くの著述を遺されたのは貝原益軒であります。益軒名は篤信、字は子敬、家は代々筑前福岡の藩士、寛永七年を以て生れ、幼より學を好み、長じては當時其の學殖海内無双といはるゝまでに達したので、和漢の書通ぜざるなく諸子百家は勿論本草醫學にまで通曉せられたのでありますが、夙に我が國の學問の民衆に及ばざるを慨き、大和俗訓、童子訓、家道訓、養生訓を著し、少しく文字を解するものには讀み易からしめられたので、其の通俗教化に志されたことは自ら「大和俗訓」の序に於て明かにされて居ります。

「高きにのぼるには必ず麓よりし、遠きにゆくには必ず近きよりはじむる理りあれば、世の不孝にして漢字を知らざる人の爲めに、いさゝかむかし聞ける所の理りを、今の俗語を以てかきあつめて八卷とし、名づけて大和俗訓といふ、世の中の夫婦の愚なるものあづかり知らしめ、兒女のいとけなくて菽麥を辨へざるものをさとさんことを願ふのみ云々」

と、特に其の頃等閑視せられたる女子教育に眼を注ぎ、「童子訓」の中には特に女子を教

ふる法を示して居りますが、其の教育に基き、「女大學」一卷を著はしたのは此益軒の妻江崎氏、名を東軒といふお方でありまして、これが此時代の女子教育の中心教科書となつたものであります。

かく益軒は通俗的な社會教育方面に多くの書を著はして居りますが、專門的なる方面にも亦一機軸を出した學者で、「慎思錄」「大疑錄」等は其の片鱗を窺ふことが出來るのであります。正德四年八十五歳を以て逝かれたのであります。

初めを忘るゝ勿れ

こゝに掲げました箴言は何人も反省すべき訓誡で、諺にも「咽喉元過ぎて熱さを忘る」といふことがありますが、富に居ては多く貧を忘るで、金持になると貧乏な時を忘れてしまつて兎角奢侈贅澤に流れ易いものであるから、これを忘れぬやうにして儉約をせなければならぬし、「貴に居ては多く故舊を忘る」で自分が出世して貴くなると昔馴染の人のことを忘れて、偶ま世話を賴みに來ても門前拂にしたり、さなくとも「あんなものと付き合つて碌なことはない」と疎にし易いものであります。こんな時は成るべく存邨とて出來るだけ助けを與へて昔忘れぬ親みを保つがよい。「年長じては父母を忘る」で子供の間は父母を力にして成長しながら成人すると、自分一人で成長したやうに父母のことを忘れ易いものであるが、それでは人の道に外れるので、親は幾歳になつても子供のやうに思ふやうに、子も幾歳になつても親を慕ふ心を失ふてはならぬ「病癒えては多く愼みを忘る」で、病氣の中は食ひものにも、身體の持ち扱ひにも充分に注意するが病氣が癒つてしまふと暴飲暴食、無理な事もして終に身を損ふに至るものであるから病氣のない安樂な時に病氣の時を忘れぬやうにするがよいと、凡て身を修むるものは、其の初めを忘れぬやうにせねばならぬといふのであります。

俗に「始末のよい人」「始末の惡い人」といふ語があります。始に末を思へば輕はづみなことはしないのですし、末に始めを忘れねば大抵の辛抱は出來るものです。結婚する時に末始終を考へればウツカリした人と結婚した始を忘れねば夫婦喧嘩は出來ないものであります。金を借りる時に返す時の末を考へ、催促せられた時に

借りた初めの時を忘れぬやうにするのも始末の意味であります。

旅中の興趣

貝原益軒の逸話や箴言は頗る多いのでありますが、其の中最も有名なるは「近世畸人傳」に

「先生歸國の海路にて、同船數輩、各々、姓名をとひきくにも及ばず、何となき物がたりどもをして、日を重ねしに、其の中一人の若き男、人々に對して經書を講ず、先生例の恭々しく默して是れを聽いて、一言是非を論ぜず、船着岸して、各々始めて其の鄕里をあかし、再會を契りて別るゝに臨み、先生も、吾れは貝原久兵衞と申すものなりと名のらるゝを聞いて、彼の若き男、大きに恥ぢおそれて、速ににげ去りしとなん云々」

こゝに久兵衞とあるは益軒の通稱であります。先生頗る謹厚でありますが、其の自然を樂まれたことに就いては「岐蘇路記」の序に

「いにしへ人、一日の勝に遊べば一日の神仙となるといへば、わが愚かなる心のけがれも、浮世の塵も日頃經て佳境を過ぎ行くほどに忘れぬ。生きて堯舜の仁にあひて嶺南の遊をなすことを得たりと、東坡がいへる如く、大君の御めぐみによりて、太平の世に生れ、此樂を得ることといとめでたし、遊は其の一時のながめのみかは、身を終るまで折々に其所々々のありさまを思ひやれば、又目のあたり見る心地して長き思ひ出とぞなる」

とありまして、自然を以て心を養ふべきを示されて居りますから、こゝに付記して置きます。

家を治むるに忍の字を用ふべし、忍とは堪ふるなり。堪忍するを言ふ。
驕をおさへて欲を恣にせざるもこらふるなり、又我家の貧なるを堪へて、人に貪らざるべし。凡そ人君子にあらざれば、我心に適はざること多し。堪忍せざれば人の交はならず。

一一、松尾桃青

『きのふの發句は今日の辭世、今日の發句は明日の辭世、我れ生涯いひ捨てし句に、一句として辭世ならざるはなし、若し我が辭世はいかにと問ふ人あらば、此年頃いひ捨てし句、いづれなりとも申したまはれかし、諸法從來常示寂滅相、これ釋尊の辭世にして一代の佛敎、此二句より外なし、古池や蛙飛び込む水の音、此句に我一風を興せしより初めし辭世なり、其の後、百千の句を吐くに此意ならざるはなし、ここを以て句の辭世ならざるはなし』

一日是れ生涯

今度は風變りに俳聖といはるゝ松尾桃青の語を擧げました。桃青又風羅坊等といひますが、最も著るしきは芭蕉の名であります。伊賀の人、初めは松尾甚七郎宗房といひ、藤堂氏に事へましたが、其の主人良忠の死と共に暇を乞ひて身を行雲流水に托し、吟咏自適、終に俳聖とまで云はるゝに至つたのであります。こゝに擧げましたのは、或る人が彼れが臨終に對して「辭世は」と問ひました時の答へで、これは發句に就ていうたのでありますが、何人も此心得があつて然るべきだと思ひます。何故かと申しますに、この人間の生命は生れた其の時から毎日毎日死に近づきまして、今日といふ日は二度とあるのでなく、この日去つて復た來らず、一日再び晨なり難しで、澤庵禪師が

はかなしや思へば日々の別れかな
きのふのけふにまたも遇はねば

といはれた通り、この一日は全生命の中の一日で、この日復び來るものでないといふことが明かに解りますれば、決してこの一日の仕事を粗末に出來るものではありません。芭蕉が「池古や蛙飛び込む水の音」の句に俳諧の眞義を悟り、ここに所謂芭蕉流の正風を興し

てから其の日その日の發句を辭世ぞといひ切つた心持はさすがに俳聖といはるるほどの風格が見られると思ふのであります。われわれは「今日はどうでもまだ明日がある、明後日がある」と、ツイうかうかと其の日その日を送り、終に「來年は來年はとて暮れにけり」で、何事も出來ず、この生涯を無駄にするのであります。この一日は生涯の一日であるといふ覺悟ほど、人の心を引き締めるものはありません。芭蕉は日日の發句を生涯の發句としてそこに眞劍味を帶びたので、この一日を等閑にせず、無駄に費さじとする心は一寸の光陰をも惜む時間尊重の觀念となり、彼のフランクリンが「汝、生涯を愛するか、然らば汝の時間を徒費すること勿れ、汝の生涯とは汝の時間より成るものなればなり」と誡めましたやうに、この一時間も一分間も亦生涯の一時間一分間なりと思ふ時、決して粗末に費すことは出來ないのであります。其の語中に釋尊の言を引いて諸法從來常示寂滅相とある佛教ではこの世にありとあらゆるものが生じては滅し、滅しては生じて行く中に常に寂滅と不生不滅の永遠性を示して居るといふ釋尊の悟られた時の語で、一代の辭世なりと申しましたので、詳しく說明すると長くなりますから、ここには略して置きます。

今日一日の事

芭蕉の此語は他の意味から直に一日一日の教訓として考へられますので、某老舗の家訓として「今日一日の事」といふのが世に傳へられて居ります。

一、今日一日三ツ（君父師）の御恩を忘れず、不足を言ふまじき事、
一、今日一日決して腹を立つまじき事、
一、今日一日人の惡しきを言はず、我が善きを言ふまじき事、
一、今日一日虛言を言はず、無理なることを爲すまじき事、
一、今日一日の存命を喜び家業大切に勤むべき事、

右は唯今日一日の愼しみにて候。

明日ありと油斷をなさず忠孝を
今日一日とはげみつとめよ

と、たゞ今日一日と覺悟しつゝこれを續けて行くも亦一つの修養法であります。

一日の勵み

此一日といふことに就きましては、山鹿素行の語に

「大丈夫唯今日一日の一を以て極とすべきなり、一日を積んで一月に至り、一月を積んで一年に至り、一年を積んで十年とす。十年相累り百年たり、一日猶遠し、一時にあり、一時猶長し、一刻にあり、一刻猶あまれり、一分にあり、こゝを以ていふ、時は千萬歳のつもりも一分より出で一日に究まれり。一分の間もゆるがせにすれば、終に一日に到り、終りには一生の懈怠となるなり」

といふのがありまして、此一日の一を守るべきをいひ、一刻一分にまで及んで懈怠すべからざるを申して居りますが、更に北山壽安は通俗に

「たとへ如何なる苦みとても一日と思へば堪へられるべし、樂も一日と思へば溺るることもあるまじ、實にや愚かなる者の親に不孝なるも永しと思ふ故なり、君に忠を爲すも、これに同じ、一日一日と思へば退屈はあるまじ、日に新にして又日に新なりといへる如く、心術の上も一日一日と修行して、今日も目出度修行せりといふこそよけれ、日課なども今日一日一日と勤めれば、百萬年動むるも易し、何事も一生せねばならぬと思ふから大義なり、一生といふは長きやうに思へど後の事やら明日の事やら一年二年乃至百年の事やら誰れも知る人あるべからず」

と申して居ります。芭蕉の此語はさま〴〵の方面より考へられるのであります。

隨所主となる

一日々々を生涯の一日として修養すると共に、事に當りて多岐多端に流れては何一つ成就するものではない。芭蕉の俳聖とまでいはれるに至りましたのは只此一筋に心を繫ぎました爲めで、此翁の有名な文に

「百骸九竅の中に物あり、かりに名づけて風羅坊といふ。誠にうすものの風に破れやすからん事をいふにやあらん。狂句を好む事久し、終に生涯のはかりごとゝす。或時は倦んで放擲せん事を思ひ、或時はすゝんで人にかたん事をほこり、是非胸中にたゝかふ

て、是が爲に身安からず、しばらく身を立てん事をねがへども、これが爲に破られ、終に無能無藝にして、只此の一筋に繋がる、西行の和歌における、宗祇の連歌における、雪舟の繪における、利休の茶における、其の貫通するものは一なり。しかも風雅におけるもの、造化にしたがひて四時を友とす、見る所花にあらずといふことなく、思ふ所月にあらずといふことなし、像花にあらざる時は夷狄にひとし、心、月にあらざるときは、鳥獸に類す、夷狄を離れ鳥獸を離れて、造化にしたがひ造化にかへれとなり」

とありまして、これは先きに擧げました西行の我れを忘れて和歌に入ると申しましたやうにたゞ一筋に其の事と我と一つになりますのでありますが、此一を以て萬事に應ずるので、禪家の語に「隨所に主となる」といふのがあります。時に應じ所に隨ひて其の事の主となるので、芭蕉は此事を語つて

「裏に居るものは悲みを主とし酒をのむものはたのしみを主とし愁に住するものは愁を主とし徒然に住するものは徒然を主とす、さびしさなくば憂からましと、西上人のよみ侍るは、さびしさを主なるべし、又よめる。

山里にこはまた誰をよぶこ鳥
　ひとりすまんと思ひしものを

獨りすむほど面白きはなし」

即ち業を執る時は業を主とし、書を讀むときは書を主とし、日常生活も隨所に主となつてこそ專念にせられるので他へ心を散らして居つては其の事に成功することも、感興を作ることも出來るものではありません。

和　合

蝶々や花の上下あらそはず　千山
疑心暗鬼
あつさうに女のつかむ螢かな　白枝

一二、松平定信

「足れりと思ふべきは我が身、足らずとしてよき物はつとむべき道」

身命を賭す

徳川家康に初められた江戸幕府も打續く太平に紀綱次第に弛み特に十一代將軍家齊の時代に至つては多年の積弊漸く現はれ、加ふるに奢侈淫蕩の俗、一世を風靡し、斷乎たる改革を此時に行ふにあらずんば幕府の基礎保ち難きを感じ、身を挺して、之れが改革に當られたのは後に白河樂翁公といはるゝ松平定信であつた。定信は田安宗武の第三子、安永三年出て松平定邦の養子となり、天明三年封を繼ぎて越中守となり、天明七年幕府に入りて老中首座となり、鋭意弊政の改革と民風の作興を計られましたので、こゝに揚ぐる「足れりと思ふべきは我が身」とあります通り、自己の職務に對しては身命を賭して務められましたものは務むべき道」とあります通り、自己の職務に對しては身命を賭して務められましたので、其の事の最も明かなのは、其の老中となつて弊政改革を斷行せんとする時、一命を懸けて、本所なる吉祥院の歡喜天に左の如き祈願文を呈せられたことに於て最も明かであります。即ち

「天明八年正月二日、松平越中守定信儀、一命を懸け奉り心願仕り候、當年米穀融通宜しく、格別の高値に之なく、下々難儀仕らず、安堵靜謐仕り、並に金穀御融通よろしく、御威信、御仁惠下々に行屆き候樣に、越中守一命は勿論の事、妻子の一命にも懸け奉り候て、必死に心願仕り候事。右條々相調はず、下々困窮し、御威信、御仁德行屆かず、人々懈怠仕り候儀に御座候はゞ、只今の内に私死亡仕り候やうに、願ひ奉り候。生きながらへ候ても、中興の功出來仕らず、汚名を相流し候よりは、只今の英功を養家の幸ひ、並に一時の忠に仕り候へば、死に仕り候方、却つて忠孝に相

叶ひ候儀と存ぜられ候、右の仕合せに付き、御憐愍を以て、金穀融通し、下々困窮に及ばず、御威信、御仁惠行屆き、忠孝全く成就の儀、偏へに心願仕り候、敬白」

この文は數十年後、同院の住職によつて發見せられたので、當時の人には知られなかつたのでありますが、政治家に此熱意あつてこそ、口善惡なき都人士が

世の中にかほどうるさきものはなし
文武々々で晝も寢られず

と五月蠅がられつゝも能く其の弊風を反省せしむることが出來たのであると思ふのであります。此定信の如きは、務むべき道を何時も足らじと思ふて勵んだ人と見るべきであります。

十分の努力八分の生活

まことにこの言葉の如く努むべき道は足らじと思ふて十分に勵み、我が身の生活は足ることを知つて八分目にすることは生活安定の本で、私は常に「十分の努力八分の生活」といふことを提唱して居ります。即ち働く方を十分にし、生活の方を八分目にして置けば其處に二分の餘裕が出て、いつも足らん〳〵と騷ぎ廻るにも當らぬのですが、生活の方を十分にも十二分にもしようとして奢侈贅澤に耽り、働く方は八分目か七分目にしようとするから、其處に二分も四分もの開きが出來て生活の安定を缺き、借金でもして之れを埋めねばならぬといふ苦境を現出いたしますので、分相應の生活といふのは十分の努力八分の生活を申すので百圓の收入ある人が八十圓の生活をするなら贅澤とは申せませんが、五十圓の收入の人がこれを眞似ればそこに分不相應となるのであります。此十分の努力八分の生活といふことを能く體得して行くことが、われ〳〵の處世に此言葉を應用し得る道であると思ふのであります。

自在鍵の贊

これら經濟方面に於て定信の注意深かつたことは自ら儉約を守つたばかりでなく、此儉約を萬民に勸めて有事の日の用に供せしめたので、先づ江戸市内の風俗を改良するの手初

として平生の雜費を節約して其の一部を貯ふべく、今日でいふ貯蓄奬勵を勸誘すると共に幕府金一萬兩を市民に交付し、此利息を以て市中の鰥寡孤獨を賑はし、且つ米價騰貴の際は土木を起して貧民に職業を與ふる等、今日の所謂社會政策を行ひ、市内四ヶ所に倉庫を建てゝ米穀を貯へて凶荒の用に供せしむることをいたしましたが、當時の江戸ッ子はこれを以て無用の業として之れを嘲るものさへ生じましたのが、其の後數度の凶荒はこれによつて救濟せらるゝもの多く、其の積立金は、明治に入りましては七十五萬兩の多きに達し、その一部を基本として東京養育院が設けらるゝ等、其の事業は永遠に傳へられました。曾て「自在鍵に鍋をかけたる畫」に贊して

「この尻、日に三度燒けば、天下平なり。燒かざる時は、民くるしむ、みだりに燒けば家亡ぶ、强いて燒かざれば、交り少し。おほけなくも高き屋の御製も、この尻より出でたり。貴賤貧富、みなこの尻にあり。よきにせよ、あしきにせよ。なべて世の人の心は自在鍵なり」

といひ、この鍋の尻、卽ち生活を重視し、人の心は自在鍵なりとて其の精神をいへるは、當時の武士が物質を輕んじ經濟を疎んずるを諷したものと見るべきであります。

樂翁の壁書

世に樂翁の壁書なるものを傳へて居りますが、句々處世と修養との資に供すべきものであります。卽ち

「寧靜は是れ心を養ふの第一法」

心を安らけく靜かにすることは精神修養の第一法であると申すので、これには靜座して心に波風を起らしめぬやうにするのが肝要であります。

「謹愼は是れ身を保つの第一法」

心身を放縱ならしめずして常に心を正しく持つて其の行ひを愼めば過なくして安全に身を保つことが出來ると申すのであります。

「讀書は是れ知を廣むるの第一法」

書を讀むことの見聞を廣め知識を增す本たることは今更申すまでもありません。

「勤儉は是れ生を治むるの第一法」

勤はつとむ、儉はつゝましやかで、卽ち勤は十分の努力であり、儉は八分の生活であります。生活を安定ならしむるの第一法であるといふ意味であります。

「含容は是れ人を待つの第一法」

まことに人に接する春風の如く能く之れを容るゝは人に對する第一法であります。

「愼交は是れ害に遠ざかるの第一法」

交際に愼しむことが害に遠ざかるの道であるので、それには交るべき人を持たねばなりません。

「安祥は是れ事に應ずるの第一法」

心を平かにして能く事物の本末輕重を見て行くのが事に應ずるの道であります。

「知足は是れ樂を享くるの第一法」

足ることを知らなければ足りん〳〵で何時も心の樂しいことはありませんが、足るを知り、分に安んずれば自ら樂を享けることゝなるのであります。

「存厚は是れ福を招くの第一法」

謹み深く穩かに情誼を存することは福を招くの本であります。

「寡慾は是れ壽を延ばすの第一法」

慾を寡くすることは壽命を長くするの本であります。其の事は百歳の長壽を保つた江村專齋に後水尾上皇が長壽の術を問はれた時、

「臣、平生唯だ一些字を持す、飲食些し、思慮些し、養生些し、此他豈に術あらんや」

と答へたといふことでも明かであります。

水泉深ければ則ち魚鼈之れに歸し、樹木盛んなれば則ち飛鳥これに歸し、庶艸繁れば則ち禽獸これに歸し、人主賢なれば則ち豪傑之れに歸す。

呂氏春秋

一三、二宮尊德

『富貴貧賤生滅の祕法相傳の義は、財寶を貪る者は終に自然と禍を發して貧賤其の中に生ず、又財寶を讓り施せば終に自然と福發して富貴其の中に生ず』

經濟と道德

經濟は自利を目的とするもの、道德は利他を主とするものと考へ、此二つは常に相反するものと見られまして、甚だしきは「金儲けの道は三かく法」とて「義理を缺き、人情を缺き、其の上恥をかけ」とまでいはれて居りますが、それは決して眞に經濟と道德との關係を見たものではないので、不義の利益でない實利と、死んだ道德でない眞の道德とは互に一致いたしますもので、たゞ一時目前の利益を得ますするには人を欺き世を騙る不義不德でも得られぬことはありませんが、それは決して永遠の利益ではありません。早い話が惡い品物を高く賣れば一時は儲かりますが、誰れが續いて買ひに行きませう。善い品を安く賣れば儲けは少いやうですが、それは店の信用になつて永遠の利益は得られるのであります。されば徒らに財寶を貪る者は終には貧しくなり、之れを讓り施せば自然と富を生じますので、此經濟と道德との一圓融合を說いて其の根本に入り、報德の敎を立てられたのは天明七年を以て相模國足柄上郡の貧農の子と生れ、刻苦奮勵、其の家を興し、獨學黽勉、其の學を修められた二宮尊德其の人であります。幼名は金次郎と申して其の敎を實行せられた有名な人であることは申すまでもありません。其の「貧富訓」にいふ

「貧　遊樂進二分外一、勤苦退二分內一、則貧賤在二其中一。
富　遊樂退二分內一、勤苦進二分外一、則富貴在二其中一。
夫唯匹夫は富貴を好んで貧賤を惡む、元富貴貧賤は天にあらず、地にあらず、又國家にあるにあらず、銘々の一心にあり、常に我身を治めて人を治る者は富貴其身に備ふ、常

に我身を人に治めらるゝものは家業を勤め分を守りて富貴をたもつ、常に我身を人に治められて我身を我意にまかするものは、貧賤其身に備ふ、元富貴貧賤は一心一念の變化する所なり、本來同志遠隔なる事をさとりて、ともにともに勤行いたし度事に候」

とありまして私の先きに申しました十分の努力、八分の生活であります。分内といふのは八分目にすること、分外といふのは十二分に出ることであります。又いふ、

「富の弊は驕奢、これを改めずんば子孫困窮の本、
貧の弊は怠惰、これを改めずんば子孫滅亡の本」

と誡め、更に此二つを融合すべく、

「家を保つも、身を修るも、金錢の出來るも、何も不思議はない、誠の一つを以て之れを貫くのぢや、誠は天の道、之れを誠にするを人の道といふぢや」

と教へて居られます。此至誠はまことに一切の本で、これに先きにいふた分度を守ることゝ、自ら勵む勤勞と他に讓る推讓とを以て、報德教の四大要目とせられて居るのであります。

報德の訓

此報德の更に根本を示されたのが報德訓で是れには

「父母の根元は天地の令命にあり
身體の根元は父母の生育にあり
子孫の相續は夫婦の丹精にあり
父母の富貴は祖先の勤勞にあり
吾身の富貴は父母の精善にあり
子孫の富貴は自己の勤勞にあり
身命の長養は衣食住の三にあり
衣食住の三は田畠山林にあり
田畠山林は人民の勤耕にあり
今年の衣食は昨年の產業にあり

來年の衣食は今年の艱難にあり
年々歳々報德を忘るべからず」

と、報德教の要旨を示されたものといふべく、其の根元を尋ねて其の德に報ゆべきを示したので、尊德は凡そ世の中は悉く相對で一方を立てれば一方が倒れるやう吉凶、禍福、苦樂、喜憂と相對して兩方ながら全ふする道は少いが、天地と父母と夫婦と農業との四つは相對兩全であるとし、「天地の道あり、天は生々の德を下し、地は之を受けて發生す、親子の道あり、親は子を育して損益を忘れて生長を樂み、子は育せられて父母を養ふ。夫婦の道あり、相互結合して相結び子孫相續す、農業の道あり、農夫勤勞して植物の繁榮を樂み、草木其培養を受けて欣々として繁茂す、此四道は相對兩全のものにして、之を法則と爲さば過誤なかるべし、夫れ借りて喜び、貸して悅ばざるは道にあらず、貸して悅び、借りて悅ばざるは道にあらず、我が教は天地生々の心を心とし、親子と夫婦との情に基き、損益を度外に置き、國民の潤助と大地の樂福とを樂む也」と申して居ります。この語によつて前に掲げた天地、父母等の意義が明かであります。

推讓の德

更にこの相對兩全の道を行ふべく推讓の德を擧げ

「夫れ推讓は萬物增培豐富之道也、掠奪は萬物減少死亡の道なり、試みに近く之を譬ふれば今茲に米粟一苞あらん、直に貪りて之を食へば、僅に數日の食のみ、一苞盡くるの後は復た一粒の得べきものなく、飢渴死亡の憂を免れず、若し之を讓つて以て土中に蒔ば數十苞となり、又讓つて蒔かば數百苞となり、年々歳々此の如く讓らば數萬の粟を生ず、又一家の內、父たる者子に讓る、之を慈といひ、子たる者父に讓る、之を孝といひ、兄として弟に讓る之を良といひ、弟として兄に讓る、之を悌といひ、夫として婦に讓る、之を義といひ、婦の夫に讓る、之を聽といふ。此の如くなれば一家和睦し財優かにして安居を得るや必せり、若し一物の微だも父子互に奪ひ、兄弟互に奪ひ、夫婦互に奪はゞ忽然として忿怒怨望起り一家破滅の禍立て待つべき也、一家すら猶ほ斯の如し、況や國天下に於てをや、人君自ら分を引き去り、有餘を生じ、之を讓りて四民を惠み、

偉人の言葉

大に仁政を施さば、誰か敢て感動せざらん、誰か敢て悅服せざらんや。大夫隨て讓り、士も亦互に讓り、庶人爭うて讓る、此時に當りては財ある者は財を讓つて米粟ある者は米粟を讓り、或は衣を讓り、食を讓り、道を讓り、田圃を讓り、家を讓らざるなく、人〻讓らざるなし、國家日に隆盛豐富、菽粟、財寶、湧くが如く、民安んぞ不仁なるものあらんや、五倫五常の道を自ら其の中に流行す、何をか憂ひ何をか求めんや」

と示し此推讓の道德を經濟の方に應用し、今日の物を明日に、今年の物を來年に讓るやうに消極的に分度を守つて節約すべきを說くと共に、積極的に勤勞を勸めて增殖の道を說き、これを以て天地の化育を助くるの大道なりと敎へて居られてをります。

敎訓と道歌

翁の訓言の我等を勵ますものは頗る多いので、こゝに揭ぐるは僅に片鱗であります。

一、人々常に我より善を施すことに勉むべし、彼よりはまた善を以て酬ゆるを望むべからず。彼は彼、我は我なり。我は只々我が道を行ふべし。彼が善不善は我が心にあづかるべからず。

一、朋友親戚の間は、只々誠を以て交るべし。

一、人我れに過ちあらば、其の心を廣くして之を許すべし、我身に過ちあらば、其の心を少にして責むべし。

一、君子は仁を保ち、身に善を行ひて其の善を人に知らしめざるを欲するは、卽ち陰德なり。

一、大丈夫爲さゞれば卽ち已む、爲せば卽ち奮發銳進して以て大成を期すべきのみ。

一、人は皆其の獨りなるときは、誠實なるものなり、然れども他人の前に現はるゝや否や、直ちに僞善虛飾の人となるものなり。

一、物の本來を辨ふるより、大なる智慧はなきものなり。人にして其の知識益々進めば、身は愈々謙遜に赴くべし。

其の和歌に托して敎を述べられたものも亦多いのでありますが、今四大要目に就いて四首を擧げます。

至誠

曇らねば誰がみてもよし富士の山
うまれ姿でいく世經るとも

勤勞

天つ日の惠みつみおく無盡藏
鍬でほり出せ鎌でかりとれ

分度

めしと汁木綿着ものは身をたすく
奢ればすぐにてきと成りぬる

推讓

おのが子を惠む心を法とせば
學ばずとても道にいたらん

一四、西郷南洲

『平生、道を踏まざる人は、事に臨みて狼狽し、處分に苦しむものなり、例せば出火のとき、平生處分あるものは動搖せずして、取始末も能く出來るべしと雖も、平生處分なきものは、唯狼狽して措く所を知らざるに至る。平生道を踏み居るものにあらざれば、事に臨みて策略は出でざるなり』

平生の覺悟

西郷南洲、名は隆盛、其の明治維新の元勳であり、後年薩南健兒に推されて賊名を蒙りましたが、其の近代の人傑たることは今更らいふまでもありません。此の一語によつても

其の風格の一端は窺ひ見らるゝのであります。

一體人間といふものは、平生の時には兎角心を弛めてをりまするもので、其のために大事に當つて周章狼狽して其の處置に苦むものでありますが、平生からチャンと正しき道を蹈んで心の覺悟が充分にしてあれば、大事に當つて其の處置を誤るものでないが、平生、油斷ばかりして居つては、イザ大事となつた時には手も足も出ないものであります、丁度火事が起つたからとて狼狽して消火器を買ひに行くやうなもので、それでは間に合ふ筈はありませんが、平生から消火器の準備があれば、ソレッ火事だというて、直ぐ間に合ふやうなものであります。されば禪語にも「平常心これ道」とありまして、此平生の心が道にさへ合つて居れば、そのままこれに應用して行けるので、古人も「道は須臾も離るべからず、離るべきは道にあらざるなり」と敎へて居ります。兎角平生は道を離れてゐるものでありますから、非常の時に間に合はないので、此普段の心掛けほど必要なことはありません、されば南洲は又

「凡そ平生默座靜思の際に思慮すれば、有事のとき十の九八は履行せらるるなり。事に當りて卒爾に思慮するは、譬へば臥床夢寐の中に奇篇妙計を得るが如く、翌朝起床の時に至れば、無用の妄想に屬すべし」

とてここにも平生の覺悟を說いて居ります。西鄕南洲の沈毅にして果斷であつたのも、此平生の修養から來たので、決して偶然ではないのであります。

活學問と死學問

西鄕南洲は夙に儒學に志し、研鑽おさ〳〵怠りなかつたのでありますが、或る時一人の禪僧が

「貴下の學べる儒書に、喜怒哀樂の未だ發せざる之れを中といふとあるが、その未發の中とは何であるか」

とそこで彼は種々自分の讀み得た所を講釋しましたが禪僧はそれを聞いて曰く

「それは文字の講釋である。朱子や陽明などの古人のへじ糟である。畢竟學問である。どうか貴殿の活きた實物を見せて呉れ」

と、此の一言に彼は茫然自失し、啞然として答ふる所を知らなかつたといふ話が傳へられて居ります。

此僧の何人であつたかは明かでありませんが、恐らくは同地福昌寺の無三禪師であらうと想はれます。此禪師は非常に機鋒の峻烈な人でありまして、南洲も此和尚に參りまして死の一字を究め、頗る通達する所がありましたので、それからといふものは文字の講釋たる死學問を離れ、寧ろ活學問にと志しましたことは、勤王倒幕の運動や、江戸城受取りの態度や、明治政府の役人としての行動についても知られますので、其の一例としてお話出來ますのは、維新後征韓論の盛な時「おれは副島種臣君のやうに學問がないから向ふに行つてやかましい議論は出來ぬが、死ぬことだけは知つてゐるからやつて呉れ」といふといふ話が傳へられて居ります。これは南洲の所謂

「命もいらぬ、名もいらぬ、官位も金もいらぬ人は、始末に困るなり、此の始末に困る人ならでは艱難を共にし、國家の大業を成すこと能はず、然れども此の如き人は凡俗の眼には見るべからず」

といへる、活學問の骨頂を示したものと見るべきであります。

南洲遺訓

南洲の遺訓は我等が處世の箴とすべきものが頗る多いのでありますが、左に二三を紹介いたします。

一、過を改むるには、自ら過てりと思はゞ夫にて可なり、其事をば棄てゝ顧みずして、直ちに一歩踏み出づべし、過を悔い取繕はんとして、心を苦しむるは、譬へば茶碗を割り、其破片を合せ見るも同然にして、無用のことなり。

一、身を修め己を正しくして、君子の體を具ふるとも、處分の出來ざる人は木偶人も同然なり、譬へば數十人の客、不意に入來らんに、如何に饗應せんと考ふるも、豫て器具調度の備無ければ、唯心を勞するのみにして、取賄ふこと出來難し。常に備あれば、幾人なりとも數に應じて賄はるゝなり。故に平日の用意肝要なり。

一、猶豫狐疑は第一の病毒にして、害を爲すこと甚だ多し。何ぞ憂國の志情の厚薄に關せ

んや。義を以て事を斷ずれば、其宜しきに適ふ。何ぞ狐疑を容るゝ暇あらんや。狐疑猶豫は義心の不足より發するものなり。

一、一家の親睦を計るには、世人は多く人倫五常の道をいふ。然れども是れは當然の看板のみにして、今日の用に益なく、怠惰に墮ち易し。速かに手を下すには、慾を離るゝこと第一なり。一つ美味あれば、一家擧つて食し、衣服を製するにも、必ず良きを長に讓り、自己を顧みず、互に誠を盡す可し。只慾の一字より、親族の親しみも離るゝものなれば、其根據を絶つこと肝要なり。されば慈愛自然に離れざる樣になるものなり。

勝海舟の名言

此西郷南洲と肝膽相照らし無事に江戸城明渡しをなさしめた勝海舟の話としてコンナ事が傳へられて居ります。

「己れが嘗て大久保一翁から聞いて感心したことがある。彼の江戸城引渡しの當時、西郷に就ての一美談だ。其の當時といふものは、非常な物騷な時節で、殺氣滿都に充滿するといふやうな、中々油斷の出來ない時分だ、それ故に城を受取りに來る官軍の委員等も、非常の警戒で、堂々たる官軍の全權委員の一人が、狼狽の餘り、片一方の足の草履を穿ちながら、玄關をかけずり昇つたといふ位な奇談さへ殘つて居るのだ、此の物氣味の惡い中を、西郷奴は、圖太いとも横着にも、悠々として少しも平生に異らず、實に貫目があつたといふことだ。就中驚いたことは、城受渡しに關する色々の式が始まると、西郷先生居睡りが始まつた。それから諸式がすんで了つて、皆の全權委員等がヅン〳〵引取つて了ふたけれども、猶ほ先生はフラリ〳〵とやつて居る、流石の大久保參政一翁も、傍よりたまりかねて「西郷さん〳〵、最早式が濟みまして、皆さんお歸りで御座る」とゆり起せば、先生ハァーと言ひながら、寢惚け顏を撫でつゝ、悠然としてぼつ〳〵歸つて行つたといふことで、一翁もひどく感心して居たよ」(三舟祕話)

と、此勝海舟も亦卓拔の人で其の處世訓として、

「人は何事によらず、始終胸中より忘れ切れぬやうでは堪つたものではない。何事も凡

て忘れてしまつて、胸中平然として居て、始めて萬事に應じ、縱横自在の判斷が出る、一乘圓明と云ふので、始終あれはどうの、是はかうのと、心配ばかりして居ては、自然と氣が餒ゑ、神が鈍れて、電光石火に起り來る事物の應接は出來ぬ。始めからア、言はふのかうしようのと、心配する程馬鹿げた話はない。時と場合に相應し、それ〴〵の智慧分別は出るものよ、只だ自分が平生の心の養ひ方が大切だ、人間萬事能く忘るゝにあり、さうでなくては體が幾つあつても堪らないよ、人は不斷の修養さへ積んで居れば、事に臨んで決して不覺を取るものでない」

と、以て南洲の言と相映發する所ありと申すべきであります。

一人一訓

一人一訓

『物に感ずる心ありてこそ憐む心もあらめ、道理を聞きては心に感じてこれを保ち、惡を見聞しては心に避けてこれを捨つべし、感ずる心なくば千萬の金言を得、萬卷の書を讀みたりとも益なかるべし』

太田道灌

今年は江戸が東京となつてから七十年目であるが、其の江戸の創始者ともいはれる太田道灌は頗る和歌に堪能で、後土御門天皇の武藏野を問ひたまふに對し、

『露おかぬ方もありけり夕立の
　そらより廣き武藏野の原』

と奉答し、天皇叡感斜めならず御製をたもふて

武蔵野は刈萱のみと思ひしに

かゝる言葉の花やさくらむ

と仰せられたほどの歌人で、右の訓言も和歌に就ていふたのであるが、人間の最も美しき心の働きは物に感ずるといふことで、兎角今日の人は何事にも小理窟を揑ね廻して物に感ずるといふ心が薄く、どんな立派な言をきいても、「それもさうだけれども」とか、立派な行ひを見ても、「あれはよいけれども」と、此「けれども」が邪魔になつて、眞底から物に感ずるといふことがない。感激なき所によい藝術の生れ出ないのはいふまでもなく、よい行ひも出來るものではなく、センチメンタルな小さな感傷に心を痛むるの外はなく、大なる感激こそ大なる活動の源となるものである。

太田道灌、名は持資、上杉氏の臣、長祿元年千代田城を江戸に築く、文明十八年七年二十六日を以て上杉定正の爲めに刺殺せらる。時に年五十五。

『國家の爲に身命を輕んじ、世を重んじ、私を捨て、過を改め、腹立なきにも怒り、怒りたきをも耐え、聖人の言葉を恐れ、理法に心底を任せられ候へば、卽ち天道神慮他所にあるべからず』

島津忠良

薩南健兒の士風を鼓舞するの源は遠く日新公島津忠良にある。此訓言は其の孫義久に書き與へられた一節で、國家のためには身命を輕しとし、世の爲め人の爲めといふことを重んじて、自分勝手の心や自分自身の身といふやうな私を捨てゝ、自分のためには怒らざるも世の爲め人の爲めには大に怒るの勇猛心を奮ひ起し、常に聖人の敎を鏡とし自ら省みて過失あれば之れを改むることを怠らずして行けば天の道にもかなひ、神の思召にも副ふことが出來るといふのが、此意味である。此訓言と共に義久に贈られたる歌に

善も惡、惡も善なり爲せば爲す、

こゝろよ心、恥を恐れよ

とあり、又名高い「日新公いろは歌」の中にも

佛神他にましまさず人よりも
心に恥ぢよ、天地よく知る

といふのがあつて、此天地を相手にする正しき心の中に、神も佛もましますとの意味が充分に示されて居りますし、又同じいろは歌に

種子となる心の水にまかせずば
道より外に名は流れまじ

とも書かれてゐる。

島津忠良は島津氏の祖先日新公の名を以て知らる。永祿十一年、七十七歳を以て逝く。

自ら勞して自ら食ふは獨立自尊の本源なり。獨立自尊の人は自勞自活の人たらざるべからず。

福澤諭吉

『拜みをすること身の行ひなり、心を直に柔かに持ち、正直を旨とし、上を敬ひ、下を憐れみ、有るを有るとし、無きを無きとし、有りの儘なる心持、佛意神慮にも叶ふと見えたり。たとひ祈らずとも此心持あらば神明の加護あるべし。祈るとも心曲らば天道に離され申さんと愼むべし』

北條早雲

戰國の世、身は一介の浪人より起つて終に關八州に覇を唱へた北條早雲は二十一ケ條の心得書を示して其の士卒を訓へた、こゝに擧げたのは其の一節で、常に正直な心を以て世に處すべきを敎へ、彼の古歌に

心だに誠の道に叶ひなば
祈らずとても神や守らん

といへる意義を明にしたのである。其の他の敎訓の中にも「上下萬民に對し、一言半句に

ても虚言申すべからず」といひ、御用などを承りて返事を申上ぐるにも「御返事は有りの儘に申し上ぐべし、私の頓才を申すべからず」ともあつて、正直を心の掟として、さて最初に「拜みをすること身の行ひなり」とある通り、心さへ誠なればよしと、神佛に對して拜禮等を怠るものは自然に其の心も荒みて誠ならぬ道にも入るものであるから、拜みといふ身の行ひも、大切なることを示したので、何事にも身の行ひと、口でいふことと、意で思ふこととの三つが一つにならねば、眞に正しき行ひも、正しき語も正しき心も生ずるものではありません、これを身口意相應と申します。

北條早雲初め伊勢新九郎長氏といひ、流浪して駿河の今川氏に寄寓し、志を得て小田原に居り、關東の雄であつた。永正十六年八十八歳を以て歿す。

かへりみよ身を幾度も日永時　虚白

『何事も技倆を好くいたし度候はば、心のむさきことなきやうに、これ第一なり。細工人は一生貧なるものと心得、常に心のよごれぬやうにいたし度候。』

土屋東雨

土屋東雨は金物彫刻に於ては江戸時代奈良風の三傑とまでいはれた有名な人で、右に擧げたのは、或人に與へた書面の中の一節ですが、如何にも細工人の心得をいひ盡くして居ると思はれます。貧乏を苦に病んで金がほしい〳〵で仕事をやつては其の心が細工の上に現はれて清い立派なものが出來る筈はない。一生清貧に安んずる覺悟を以てこそ、心に何の求むる所なく、たゞ其の技藝に勵むことが出來る。心の汚いといふことが一切技藝の妨げである、心を清くしてこそ技藝に專らになることが出來るので、金を儲けようの、人に譽められようのといふやうな卑しい心があつては立派な藝術は出來上るものではありません。

偉人の言葉

凡て一藝一能に秀でた人の言は皆な心の戒めとなるもので、鉋の名工といはれた義廣といふ人の語に「人間は數ある中の數に入らぬといかねえ、職人が中の職人とならねえぢや、死ばつた方がよい」といふのがあつたさうですが、このやうに其の仕事に熱中してこそ名人上手といはれるに至るので、これはまだ名に執着して東雨のやうな悟境には達して居りませんが、それでも立派な覺悟と見るべきです。

東雨、名は彌八、安親といひ、延享元年七十五を以て歿す。

此時代の奈良風金工の三傑は此東雨と奈良利壽と杉浦乘意でありました。

其の道に入らんと思ふ心こそ
我が身ながらの師匠なりけり
何もなき心を常にもつ人は
身の禍は消えはつるなり

道歌

『世界の珍器は國家をくだく斧なり、珍味は命をせむる大敵なり、色欲は是非に及ばざる所なり』

大内義隆

これは奢侈贅澤を戒めた語で、世界の珍器を集め、其の爲めに民の膏血をしぼりて千萬金も惜まぬといふやうな驕奢な生活をする國王は終に其の國を滅ぼすものであることは古來の歴史が示して居るので世界の珍寶悉く集つたと威張つた羅馬の國も久しからずして亡び、葡萄の美酒、夜光の杯と誇つた唐の天下も其の時から傾きかけました。何も遠い外國の例を引くまでもなく、榮華に驕る藤原氏も終に亡び、驕る平家も久しからざりしことは、日本の例でも明かでありますから、これを國家をくだく大きな斧と申しました。大内義隆は國主大名でありましたから、斯く申しましたが、これは國主大名に限らず、少し金の出來た町人百姓でも驕りに長じ贅澤になりましては所謂「賣家と唐樣でかく三代目」とならざるを得ないのです。「こんなものは食へない」などと食物に贅澤をいうて珍らしい

ものを好むやうになりそして終に其の身の健康をも害するに至りますから、之れを命を攻むる大敵と申したのであります。色慾は是非もなき所と申したのは此頃申す「是非もなし」といふ義ではなく、其の頃の用語にて「いふに及ばぬ」といふ意味で、これこそ國を碎く斧、命を攻むる敵と申したのであります。

大内義隆は戰國時代の武將、中國の守護となつて勢威四隣に振ふ。自ら戒めたる此言に背き驕奢に耽けり、終に自らの言の如く陶晴賢に亡ぼさる。時に年四十五。

獸を遂ふものは、目、太山を見ず、嗜慾外にあれば則ち明蔽はる

准南子

人各々能あり不能あり、我は孔明たること能はず、孔明は我たること能はず

伊藤仁齋

『あやしき事を語るは必らず其の心の正しからぬ人のいふ事なり、ただ常ならんぞ萬たがふ事なし』

小督局

怪奇なことをいひ觸らすは大抵心の正しからぬ人が他人の隱くしごとを探り出し、他人の知らないことを物知り顏にいひ觸らすので、心の正しき人は何事も素直に其のありのままに見て行くものぞといふ戒めで今日のやうに世の人が流言蜚語に惑はされ易き世の中には必要な語であります。小督は高倉天皇に寵せられた有名な美人で、又琴の名人でありました。「和論語」に此語を記して「此銘言を聞召して高倉院、別して愛したまひしとなり、心ざしの有難き女房にて內裏にありし時も、傍輩の女房を守りたて、他人をそだて、下つかたのものゝあやまりを身に代へてすくひしことたび〳〵なり、嫉むことつゆなかりしとなり」と褒めて居ります。

凡そ人は常に異つたことに興味を持つものでありますが、これは直ぐ飽きるもので、い

つまでも續いて行くものは何の異變もない平常の道であります。珍味佳肴も終に飽きますが、毎日飽かぬのは米の飯であるやうに、この常ならん心、度々申す如くこれを禪家では「平常心是れ道」と申しまして、此平常の心を失はぬやうにして居れば人に欺かるゝことも無く、正しく世を渡つて行くことが出來るのであります。

小督の局は高倉天皇の寵侍、平清盛の嫉む所となり潛に宮を出て、嵯峨野に閑居す。帝、源仲國をして之れを索めしめられ寵幸特に篤し、清盛怒りて之れを捕へ尼とす。時に年二十三。

名聞深ければ誠少し、利慾厚ければ利を知らず　熊澤蕃山

人の是非は知り易く、己れの長短は見難し　伊藤東涯

『人の嘉言善行は則ち吾が心中の善、人の醜言惡行は亦吾が心中の惡なり、是の故に聖人は之れを外視する能はざるなり。』　大鹽中齋

「他人の振り見て我が振りなほせ」といふ俚諺があります通り、兎角、自分のことは棚へ上げて他人のことを彼此いひたがるのが人間の弱點でありますから、人を評する前に「若し自分であつたら何うするか」と自己に反省する時、善惡ともに自己の修養となりますので、自分の方は寛容にして代人の方は苛酷に陷り易い心の身勝手を取り除いて、皆なこれを自己の反省へと持つてくれれば、惡と見ては自ら警め、善を見ては自ら奬んで行くことが出來るのであります。

この言葉は、人の嘉い言や善い行ひも、醜い言や惡い行ひも皆な自分の心の中にあるので、我も人、彼れも人、立派な人になれる資格もあれば、泥棒にもなれる資格があるのだから、善を見ては及ばんことを思ふて心を勵まし、惡を見ては陷らざらんことを思ふて之

れを戒め、徒らに外に求めずして、皆な自分の心の中のものとして修養せねばなりません。

傀儡師、首にかけたる人形箱
佛出さうと鬼を出さうと

まことに危險な心を持つて居るのであるから、之れを内に反省することが必要であります。

大鹽中齋、名は平八郎、德川末期の學者にして大阪の與力。天保飢饉に義擧を企てし傑物。

そこひなき淵やはさわぐ山川の
淺き瀨にこそ仇浪はたて

○

汲あげて見れば色こそなかりけり
紅葉ながるゝ白川の水

古歌

『人を教育するは菊好きの菊を作るが如くすべからず、百姓の菜大根を作るが如くすべし。』

細井平洲

細井平洲は此句を解して「菊好きの菊を作るは花形見事にそろひし菊のみを咲かせたく思ふが故、枝を切り蕾をつまみ、伸びる勢ひをゆるめて我が好みの如く開かざる花は花壇中に一本を留めぬものなり」と菊を作るもの、其の本性を矯めて我が意に從はしめんとするをいひ、さて「百姓の菜大根を作るは一本一株も大切にして、一畑の中には良きものもあり、然らざるものもあり、大小そろはずそれ〴〵に育てゝ良きも惡きも食用に立つるなり」といひ、「人を教育するも亦これに同じく材成りておの〳〵其の用に供すべし」と、これは至極もつともなことで、自分の氣に入らぬからとて枝を切り、蕾を摘み、伸びる勢ひを防ぐやうに、一つの型に入れんとするは人を教ふるの道でなく、其の自然を矯めずして適材適所に發達せしめて其の用に供せしめねばならぬ。これは人を教ふる道ばかりでな

く、人を使ふに於ても矢張同じで、人おの〳〵其の長所短所を異にして居る、よく其の短所を補ひて其の長所を發揮せしむるやうにせねばならぬ。人間としては同じであつても、人々個性といふものを持つて居るのを強ひて自分の思ふがまゝに使はんとすれば、たゞ面從腹背の人ばかりになつて、適材適所に使はるゝものではない。平洲の教育方針は又人を使ふものゝ心得ともなるべきものである。

平洲、名は徳民、徳川時代の學者、享和元年歿す。

心自ら心を證し、心自ら心を覺す、これを菩提を成すと爲す。他によつて證し、他によつて覺するにあらず。

大目經疏

○

自己の面目を明むれば祖佛に同じ、如何、自己心を明めん、强て節目を立つること勿れ。

桂蕚禪師

『死而後已の四字、言簡にして義廣し、堅忍果決、確乎拔くべからざる者、是を捨てて術なきなり。』

吉田松陰

吉田松陰の幕末の志士たることは、あまりにも有名であり、其の門下から維新の風雲を呼び起したことも今更いふまでもありませんが、彼には其の徒を教養しました「士規七則」といふものがありまして、其の最後を、此一句を以て結んで居りますので、死して後已むの語は實に松陰の精神であり、彼は此一語によつて、終始したとも申すべきであります。彼は實に、義は山岳よりも重く、死は鴻毛より輕しと覺悟して、彼の師、佐久間象山が、「語を吾が門同志の士に告ぐ、榮辱によつて、初心に負くなかれ」といふに對し、「已に死生を把つて餘事に付す、何ぞ榮辱によつて初心に負かんや」と答へて、死生を顧みずして大義を唱へ、終に幕府の忌む所となり、捕へられて江戸の獄に送らるゝや、

鳴かずあらば誰かは知らんほとゝぎす
　さみだれ暗く降り續く夜は

と詠じて時世を憤慨し、其の終に武藏の刑場に斬せらるるに當つて

身はたとへ武藏の野邊に朽つるとも
　とゞめおかましやまとだましひ

と、其の留めおいた日本魂が終に維新の改革となつたので、彼の士氣は死して後已まざるものがあつたと申すべきであります。

松陰は長門の人、四方に遊學して江戸に入り佐久間象山に師事し米船浦賀に來るや國禁を犯してこれに搭乘して海外の文明を視察せんとして果さず、長門の獄に投ぜられ、後、許されて家に歸るや松下村塾を開いて志士を養成し、勤王の大志を抱いて京都に出で、幕府の捕ふる所となり安政六年江戸に刑せらる。

『懈心、一たび生ずれば、自暴自棄す、擧世、譽むれども進むることを益さず、擧世、毀るとも退くことを益さず。』

池田光政

徳川時代の諸大名中名君といはれた備前新太郎少將、池田光政の日常使用した硯箱の蓋に刻ましめた語であります。光政、身は備前三十餘萬石の大名でありながら少しの懈る心もなく勵んだ人であります。常に此硯に對する毎に人間は少しでも懈る心が起つては「モウ駄目だ」「何とでもなれ」といふ自暴自棄即ち燒け糞になつてしまうものであるから決して此心を起してはならぬ。世の中の人が皆な譽めてくれたからとて、それで自分の學問や仕事が進んで行くわけではなく、却てそれで安心したり、その調子に乘つたりすると退くものであり、世の中の人が皆な毀つたからとて、それで自分の人格の價値が下るものではなく却て「これではならぬ」と反省して高まることがあるのであるから人が譽めたから「それでよい」と懈る心を出したり、人が毀つたからとて、「やけ」になつて其の仕事

をやめるやうではならぬとの誡めであります。此人の和歌に

ともすれば人をうらむる心あり
　おろかなる身をおもひ忘れて

といふのがあります。兎角、人は自分の身を省ることを忘れて、世を怨み人を恨む心の起るもので、此硯の蓋の語も、亦此歌の意に外ならぬのであります。

慶長十四年に生れ、天和二年七十四歳を以て逝く。有名な熊澤蕃山先生を招いて學問を奬勵した。

古德禪訓

一丈を説得せんよりは一尺を行取せんには如かず、一尺を説得せんよりは一寸を行取せんには如かず。

○

濁りなき心の水にすむ月は
　波もくだけて光とぞなる

道元禪師

佐藤一齋

『才は猶ほ劍の如し、善く之れを用ふれば卽ち以つて身を衞るに足り、善く之れを用ひざれば以て身を殺すに足る。』

才は智慧のはたらきでありまして、これを能く用ひますれば自分の身を衞ることが出來ますが、これを惡く用ひますと、其の身を亡ぼすに至りますので、其の危險なことは丁度劍のやうなもので、之れを善く用ひますれば敵を防いで其の身を衞ることが出來ますが、之を下手に用ひますれば却つて「持つた棒で打たれる」といふ諺の如く、自分の才智の爲めに身を亡ぼすに至るものでありますから、劍は常に鞘に收めておくやうに、自分の才智も深く心に藏して、少智少才を振り廻はして自ら二進も三進も行かぬ端目に陷らぬやうに心掛けねばなりません。昔、或る所に親孝行の者に褒美をやるとの布達が出ましたので、或る才氣の走つた男、王樣の前へ出て盛んに自分の親のよいことを吹聽いたしました、王樣は大に御感心になつて、これほど親を褒めるのは孝子に違ひないと思召して、「此外に

褒めることはないか」と仰せられますと、其の男はいよ〳〵調子に乗り「それよりもつと感心な事には若い時から淫慾を斷ちまして生涯女を知らなかつたのであります」といふと王様は少しお考へになつて「それでは貴様は誰の子だ」と一喝せられて、褒美どころか嚴罰を受けたといふ話があります。これらは才に任せて才に破れたと申すべきであります。

佐藤一齋、名は坦、幕末の儒者。岩村藩に事へ後出で〻昌平黌の教授たり。安政六年を以て歿す。此語は其の著「言志錄」の中にある。

牛の兒にふまれな庭のかたつむり
角あればとて身をばたのみて

古歌

『學問は置き所によりて善惡わかる。臍の下よし。鼻の先き惡し。』

三浦梅園

學問は人格養成の基礎、これを深く臍の下たる腹の底に藏するはよいが、鼻の先きにブラ下げて、如何にも物識りらしく振舞ふはまだ其の學問がシツクリと自分の人格と一致して居らぬ證據で、此人の他の語にも「學問は飯と心得べし、腹にあくがためなり。掛け物などのやうに人に見せんがためにあらず」とあり、又同じ頃の學者足代孔訓の自警の語にも「己が自慢をするために學問すべからざる事」、「名を賣るために學問すべからざる事」とありまして、學問を深く腹の中に藏して居るのは奥床しいものでありますが、これを鼻先にブラ下げて自慢するのは如何にも淺墓に見えるものです。諺にも「味噌の味噌臭きは上味噌にあらず」といひますが、學者の學者臭きは鼻持のならぬものであります。古句にも

偉人の言葉

みのるほど頭の下がる稲穂かな

とありまして内容の充實して居るものほど謙遜に頭を下げて行くのに、少しばかりの學問を鼻先きに置いて得々たるものは、却つて内容の空虚を示すこととなるのであります。

三浦梅園、名は晋、字は安貞、豐後の人、德川時代の儒者。

足代弘訓は名は權太夫、伊勢の神官の子で、有名な國學者。

友は道同じく志相合ひ、相交はるものなれば自ら詐欺の心なく信義を以て切瑳すべし。これ天然の理なり。弱を侮り利を爭ひ禽獸の群に入ること勿れ。

會澤正志

『難を避け、易きに就かんとするは人の情なり、されど、それにては我が力量を試み難し、人の難に遇つて初めて自己の力を知るものなれば、我れは一生の中、一度は大難に遇ふて我が力量を試みたく思ふ。』

山中幸盛

熊澤蕃山先生が

憂きことのなほ此上に積れかし
限りある身の力ためさん

といはれた通り、人間は艱難に遇はねば自分の力を試めすことが出來ないのでありますから、たゞ安きを貪つて居りましては、それに慣れて少しの艱難に遇ひましても意氣銷沈して弱り切つてしまふものであります。故に人間は常に少しは難かしいと思はれることも奮發して之に當るの勇氣がなければなりません。此山中幸盛は尼子氏の亡びた後にも幾多の

艱苦を嘗めて其の復興を計らんとし、生涯を困難の中に送つた偉人でありますが、常に滿ればゝ缺くとて三日月妙見大權現を祈つて「願くは我れに百難千苦を與へたまへ」と申しますから、人々が怪んで『凡そ神佛を祈るのは誰でも「安穩を與へたまへ」といふのに、何故百難千苦を與へたまへ」と祈るか』と詰りました時、右に擧げた語を以て答へましたので此心掛あつてこそ能く艱苦に耐へることが出來たので、彼のナポレオンが『世豈に我れを妨ぐるのアルプスあらんや』と、大抵の人なら越えることが出來ないと逡巡するアルプス山の嶮岨をも物の數ともせず、こゝを越えて伊太利を擊破いたしましたのも此の意氣に外ならぬのであります。

山中幸盛、名は鹿之助、尼子氏の臣にて山陰の麒麟と云はるゝ戰國時代の勇士。

何事も天のなすのと思ひなば
苦にも世話にも成らぬものなり

黒住宗忠

『君子の德業は宜しく一日は一日より勝り、一月は一月より勝り、一年は一年より勝るべし。往年此の如し、今年も亦此の如くなれば其の積む所のもの何事ぞ、只だ恐る吳下の阿蒙に終らんのみ。』

安藤省庵

立派な人とならうと思ふ人は、其の學業も一日々々と勝つて月々に進んで行かねばならぬ。若し昔も此通り今も此通りといふのでは、毎日々々何をして居つたのか、いつまで經つても吳下の舊阿蒙で、全く以てツマラヌ人間となつてしまうぞと戒めて、一日々々多少なりとも進んで行くやうにせねばならぬ。昔、吳の國の蒙といふ人は、强いばかりで少しも學問のない人で、友達にもたゞ武略あるのみと思はれて居つたが、これではならぬと學問に志して屹々として倦まず撓まず一日は一日よりと進みました。そんなこととは知らぬ友達の魯肅といふ人が久し振りで遇つて話して見ると、なか〳〵以て學も深く知識も高か

つたものですから、「吾は君をたゞ武略一片の人と思つて居つたが、今、遇つて見ると學問といひ識見といひ到底「復た吳下の阿蒙にあらず」で、一處に居つた時分の君とは全く違つた」と感心すると、蒙は答へた。「士、三日別るれば卽ち更に目を刮して相待つ」と答へて、男子たるものは三日も遇はねば其間に目を刮して見るほどに進むべきだと申したといふことがあります。人生は山を登るが如くで一日々々の向上を計らず、何時もながら同じやうで、終生碌々として麓にまごついて居るやうではならぬのであります。

安東省庵は德川時代の學者、名は守約、通稱は右之進、筑後の柳川侯の儒臣、元祿十四年八十歳を以て歿死しましたが死ぬまで孜々として勉學した人です。

もろ〳〵の心柳にまかすべし　芭蕉
二つあれば又三つほしきお正月　一茶

勝安房

『自ら處する超然たり、人に處する藹然たり、事無ければ澄然たり、事有れば軒然たり、得意には淡然たり、失意には泰然たり。』

これは有名な勝海舟先生の座右の銘で、自分の世に處するには何時も世の中の毀譽の渦中に入らず、これを超越して能く毀譽褒貶や利害得失を離れて之れを見下して過りなきやうに我が心を養ひ、人に接して行くのには春風のなごやかなるが如く藹々たる和氣を以てするので、所謂自ら肅むは秋の霜の如く、人に接するに春風の如くなるべきで、何か出來事が起つた時は軒然として之れに當るので、軒然は意氣の振ひ昂る貌をいひ、如何なる難事に對しても少しもひるむ心なく、之れに處するのであるが、事のない時は心の鏡の澄み渡つて居るやうに心を平かにして、決して雜念妄想に心を勞することなく、物事が思ふままになる得意の時には其の名譽や利慾に誇り、或は調子に乘つて得々として事をやるやうなことはなく、淡々として水の如く別段に喜びもせねば、誇りもせぬ、其の代りに物事の

思ふに任せぬ失意の時にも、別段にそれに心を惱ますこともなく泰然として「八風吹けども動かず泰山の如く」なるを修養の箴とされたのである。その意氣で幕末の難局を處理せられたので、或る時、壯漢が先生を暗殺せんとして路傍に銃をかまへて居るのを見つけ、「オイそんな構へではおれは打てぬぞ」と靜かに歩み去られた。其の態度に氣を呑まれた其の壯漢は一發も放たず逃げ去つたといふ事實さへ傳つて居るのであります。

勝安房は號を海舟といひ、幕末の三舟（山岡鐵舟、高橋泥舟）の一人、江戸城明渡しに西郷隆盛と肝膽相照して偉功あり、後伯爵に叙せられ明治三十二年七十九歳を以て薨ず。

小我は信を害し、小怒は義をやぶる　菅子
心を養ふは寡欲より善きはなし　孟子
利は智を昏からしむ　史記

『努めて心を臍下丹田に置き、常に澄水の如く、坦然として、庶事に煩はさるる勿れ。
所見狹小なれば、膽量また狹小なり、常に努めて心量を擴大すべし。』

佛光國師

これは佛光國師、祖元が北條時宗に與へて心膽を練るべく諭された訓言で、彼の蒙古來寇の時、斷乎これを擊退して賴山陽をして「相模太郎、膽甕の如し」といはしめた北條時宗も其の初めは頗る臆病であつたと見え、彼れの手記といはるゝ「みちのくさ〴〵」といふ書には「齡やうやく長ずるに從ひ、心ます〳〵精、才いよいよ巧なるも、意氣柔弱、恰も處女の如し」とあるほどで、わざ〳〵祖元禪師を支那から招いて心膽を練つたので、此禪師は支那に居られた時、元の兵隊が寺を襲ひ、白刃を揮ふて斬らんとした時、平然として「珍重す、大元三尺の劍、電光影裏に春風を斬る」といはれたので、元の兵隊は其の膽

力に驚いて斬ることが出來なかつたといふほどの傑僧でありますので、時宗が之れに歸依し、鎌倉に圓覺寺を建てゝ生涯の師としたのであります。此語の意味は人間は常に心を腹の底にヂット收めてさま〴〵の事に煩はされず、澄み渡つた水のやうに平かにして居らねばならぬ、さうすれば物に動かさるゝ事がない。と內を修むるの法を示すと共に、外に對しては見る所は狹いと量見も狹くなるものだから、見る所を廣くして心も亦廣くせねばならぬといふのであります。

佛光國師は寂後、勅諡（亡くなつて後、天皇よりおくり名を賜つたこと）せられたので、名は祖元支那明州の人、宋末元初に出でたる禪宗の大德、弘安三年日本に來り、弘安九年を以て寂せられた。此の偈の前二句は「乾坤弧節を卓するに地なし、且つ喜ぶ人、空法亦空」とあつて禪は悟を開けば一切空だ。三尺の劍で春風を斬る如きものだとの意。

貪らざるを寶と爲す　左傳

『優越觀念は深く自己の胸底に收め、他に對しては平凡中庸を以て自然に他をして敬服せしむるを要す。』

齋藤實

岩手縣水澤の役所の給仕より立身して海軍大將となり、總理大臣となり、內大臣となられた齋藤實子爵の遺品の內に三則の處世觀を拜見した。

右に擧げたのは其最後の一則で、他の二則は『(一)忍耐は人の寶なり(二)人に接するは調和を旨とし、謙讓なる態度を忘るべからず』である。

子爵は實に此三則を實踐せられた人で、人に對して少しの優越感をも示されず、其の謙讓の美德は實に他をして敬服措く能はざらしむるものがあつた。尙ほ其の遺品の中に子爵の手記になる斷片に

韓信が股をくゞるも時世と時節、踏まれた草にも花が咲く、
七ころび八起きの浮世じや心配するな、牡丹もこもきて冬籠り

偉人の言葉

といふ俗諺があつた。

これ實に「忍耐は人の寶なり」の處世訓を解説するものとして見るべきものである。

言ふことは易く行ふことは難い。子爵は生前には處世に就ては何事も語らずして、自らこれを實行せられた。却てこれを其の遺品の中に見るに於て其の人格のしのばれ、景仰の情更に深きものがあるを覺ゆるのである。

齋藤實子は岩手縣水澤の人、號を皐水といふ。昭和十一年二月二十六日所謂二・二六事件によつて不慮の死を遂げらる。時に年七十八。

よこほりて岩根に生ふる山松も
　杉の直木も本はかはらず

契沖

一週の教訓

一週の教訓

七曜のこと

一週間を日、月、火、水、木、金、土の七曜に配し、これが一めぐりして復た日、月、火、水、木、金、土と數へこれを繰返して一月、一年否な永劫に亘るとする此計算法は我が國では明治以後に新たに行はれ、其の初め開港地なぞの外人が西洋風に日曜を休みしより、これをオランダ語のゾンダク(Zun dag)より訛りて「ドンタク」といひ休日の義に用ひ、其の前日の土曜日は半休なるを以て之れを「ハンドン」などと日蘭混合の語をも生じたので、それ以前の我が國の休日は主として朔日、十五日であり、維新以後明治政府と其の初めは一、六の日を休日と定めしが、雇外國教師などの便宜から兵學寮や軍醫寮で日曜を休みとしたが、それが漸次諸官廳に及び、明治七年三月には文部省より官立學校全部日曜休

日と定められ、同九年三月に「從前一六休暇の處、來る四月より全部日曜日を以て休日とし、土曜日は正午十二時より休暇たるべし」と達せられて、一般的に此七曜のことに注意することになつたのであるが、此七曜の名の日本に傳へられたのは決して新らしいことではないのであります。

七曜の名は今から一千有餘年の昔、弘法大師によつて傳へられました「宿曜經」といふ本の中にありまして天文と卜占とを兼ねて一部の人には用ひられて居りましたので、其の書は印度や波斯等に行はれました天文曆日の事が記されて居りますので、特に七曜の名に就ては印度語、波斯語、胡語等と支那語卽ち漢語との對照も載せてありますので、早く西南亞細亞に行はれ、之れが歐羅巴へと傳はりましたことはユダヤに起つた基督教によつて日曜を安息日とすることが、一般に行はるゝに至つて居ることでも察せらるゝのであります。

元來、七曜の名に最も明かに見得る天の星は五つありますので、これを火星（熒惑）水星（辰星）木星（歲星）金星（太白）土星（鎭星）の五といたしまして之れに日（太陽）月（太陰）とを加へまして此外に天王星や海王星を發見いたしましたのは近世の事でありますから、昔は日月と此五星とを主要な星辰とし其の位置によつて運命を卜することも行はれ、曆日の計算にも用ひられましたので、我が國にも古くから「七曜の占」といふものが行はれ日曜は大吉、月曜と木曜とは、吉、火曜と水曜とは半吉、金曜は大凶、土曜は凶なぞと卜占家に傳へられて居つたのでありますが、もとより何の根據のあるものではありません。

これらの迷信を脫却してたゞ一週の計算名として用ひらるゝに至りましたのは、前に申しました如く、西洋よりの逆輸入とも申すべきものであります。

七曜と修養

此七曜を漫然と日、月、火、水、木、金、土と算へず、其日々々の修養反省の資料とすべく工夫せられたのが明治の碩德として有名なる大內青巒先生の「週訓」で、これが佛敎の七波羅密に此七曜を配して敎訓とせられたので、七波羅密とは普通にいはるゝ六波羅密

に方便の一を加へられたので、六波羅密は皆な自らの修養を主とするが、方便の一は他を教へ他を導くための手段であるので、其の一々のことは後に話しますが、これを一括して申しますには自己修養の三大目標たる智、仁、勇の三に就て申すのを便といたします、孔子も「智者は惑はず、仁者は憂へず、勇者は畏れず」といはれまして此三つを以て道徳を行ふの道とせられました、これが人間心理の三方面たる知に於ては智、情に於ては仁、意に於ては勇を目標とすべきであります。この三つのおの〳〵を積極と消極とに分けますと六波羅密となります、これに他に對する方便の一つを加へたのでありますから、これを圖示しますと

七波羅密
- 自修
  - 仁
    - 積極——布施（慈仁）
    - 消極——持戒（規律）
  - 勇
    - 消極——忍辱（忍耐）
    - 積極——精進（奮勵）
- 化他——方便（教化）
  - 智
    - 消極——禪定（靜慮）
    - 積極——智慧（知識）

となりまして、これで自ら修むると共に他をして、自利と利他とを圓滿ならしめ更に向上すべく修養し得るとするのであります。

波羅密は梵語、詳くは波羅密多で、到彼岸の義と申しまして迷ひの此の岸から悟りの彼岸へ行く渡し船のやうなものでありますから、又これを意譯して度と申して居ります。つまり現實の此岸より理想の彼岸へと渡るための修行といたすのであります、これを七つとし、これを七曜に配して示されたのが此週訓でありますから之れによつて日々反省の資とするのも亦一方法でありますから、今これを略解することゝいたしませう。

日曜（慈善）

今日は日曜なり、彼の太陽の長なへに光と熱とを萬物に施與

して皆能く其生存發育を遂げしむるを思ふべし、我等は是れ萬物の靈長と稱せり、豈亦其有する所の資財又は知識等を分ちて之を他の足らざる者に施與し、以て互に相助け相濟ふの道を履まざる可けんや、佛教に之を布施といふ。祖師曰く布施とは他の報謝を貧らず、自らが力を分つなりと。

今日は日曜であると日卽す太陽の何時も變ることなく、萬物に光と熱とを施して之れを生かし育て居ることを思ひ見るのであります、我等は一日も太陽なくして生くることは出來ないので、まことに大なるものは日の惠であります、太陽は此大きな惠みをわれ〳〵に與へてわれ〳〵から何を得て居りますか、われ〳〵は太陽の惠みを受けて何の酬ゆる所もなく、ます〳〵これを利用して人間生活の向上を計るべく諸種の發明發見をいたして之れが他の動物と異る人間の特徴でありと誇り自ら萬物の靈長と誇つて居ります、此人間の心は綺麗なものでありませうか、暗夜に提燈一つ借りても謝辭を述べねば氣まづくするのが人間の慣ひです。暗夜に提燈を借りても禮をいはねばならぬなら、朝から晩まで我等を照らしてくれる太陽には餘程禮をいはねばならぬのではありませんか、我等の太陽に學ぶ所は其の施して貧らざる所にあります、曹洞宗の祖師たる道元禪師は「布施とは他の報謝を貧らず、自らの力を分つなりといはれて居ります、考へて見ますれば天地萬物は一大布施の相で、赫々たる太陽が我等に光と熱とを施すのみならず、滾々として流れる水は我等に濕ひを施し、動物の吐く息は植物が吸ひ、植物の吐く息は動物が吸ひ、互に施しあひ惠み合ふて居るのであります。布は普なり、あまねくなりと申して凡てが其の力を分ち合ふて居るのであります。況して人間の世の中はおの〳〵其の業を異にし職を同ふせざるものが互に施し合ひ惠みあつて共同協力の社會生活をして居るのであります。

されば各自が其の持ち合せて居る智慧や才能又は金や物を以て持ち合さない人に施し互に相助け相濟ふといふことは人の世に立つ道であります、此智慧や才能を以て人を助け人を濟ふ精神的なものを法施といひ、金や物を施す物質的なものを財施といひ、此二つによつて財法二施功德圓滿とも申して居ります。太陽の光りは闇黑を照らすの智に喩へ、熱は

資財を施す人情の煖味にたとへたので、これで名譽を得やうの利益を得やうのといふ何物かを得んとする貪りの心を振り棄てゝ人間の心の奥に潜む大慈悲の心から出ること猶ほ太陽の貪ることなきを思念して自ら警めよと敎へたのであります。

月曜（規律）

今日は月曜なり、彼の月輪の常に正しき軌道を踐みて、望夜には必ず圓滿し、晦夜には必ず其影を收む、其規律として、聊かも秩序を亂すこと無きを思ふべし、我等も亦豈一身の起居動作より家庭の秩序社會國家の習慣法律に至るまで、皆必ず秩序整然として亂れざらんことを希はざる可けんや、佛敎に之を持戒といふ、經に曰く孝順は至道の法なり、孝を名づけて戒と爲すと、一切の秩序は孝を以て本と爲すことを忘るべからず

今日は月曜であると月に思ひを寄せるのであります、世にも規則正しいものは月であります。昔の人は此月の運行を見て夜の天文學を立てましたので、望夜卽ち十五日の滿月から次第々々に虧け初めて晦夜卽ち三十日に至りますと、それが全く隱れまして、朔日から少しづゝ姿を現はして三日月は弓の如くに輝き、それが半月形となり、終に滿月となるまで其の回る方向により之れを二十八宿といたしまして之れを卜占に用ひましたやうに月の軌道は少しも其の規律を違へず秩序を亂すことがございません。我等は之れによつて規律の守るべきを學ぶべしと敎へられましたので、人間の起ち居にも、動作にもチヤンと規則正しくして一家の中でも親は親、子は子、夫は夫、妻は妻と、父子親あり、長幼序あり、夫婦別ありと、おの〳〵守るべきを守つて規則正しく、國民といたしましては國憲を重んじ國法に遵ひ、社會に出ましては禮儀作法を守り、苟くも他を害し他を厭はしむるやうなことは斷じてなさないのを持戒と申します、戒は非を防ぎ惡を止るの義で、布施の積極的に人のためを計るのと表裏しまして消極的に守るべきを守つて人のためにならぬことをせぬといふのが此戒を保つ所以でありまして、其の根本となるのは人の人たる道を守ること

で儒教では五常といひ人の常道として守るべきを仁、義、禮、智、信と申しますが、佛教では之れを戒る方からの不殺生戒、生物を殺さゞるは仁なり、不偷盗戒、他の物を盗まざるは義なり、不邪淫戒、男女の關係を亂さゞるは禮なり、不妄語戒、妄語せざるは信なり、不飲酒戒、酒を飲まざるは智なりとして五戒を五常に配當して人の道を示して居りますが、更に其の大本に立ち入りますと、「梵網經」といふ大乘を示したお經に「孝順は至道の法なり、孝を名けて戒と爲す」とありまして、父母に孝ふることは儒教に於きましても「孝は百行の本」と教へますやうに人の人たる道の大本となるもので、此孝順の軌道に外れましては人の人たる道は立ち行かぬのでありますから、此月曜日に當り「我れ今日父母に孝なりしや」を反省するを第一とし、さて凡ての事に月の軌道を正しく廻るが如く規則正しく道義を守り得たるや否やを反省せよといふのであります、日々、日は東より出で、夜は月、西に入り、山は高く聳え、水は長く流れ、春ともなれば百花爛漫として開き、秋ともなれば枯葉落寞として散る天地悉く規律整然、人も亦此規律に學ばねばならぬのであります。

火曜（忍耐）

今日は火曜なり、彼の火の能く物を燒く、惡臭紛々たるを、汚穢の草木等をも厭ふこと無く、只其本分を盡して如何なる物をも燒き盡さざれば已むこと無きを思ふ可し、我等も亦豈如何なる逆境にも忍耐して、人の人たる本分を全うすることを希はざる可けんや、佛教に之を忍辱といふ、經に曰く忍の德たること持戒苦行も及ぶこと能はざる所なり、能く忍を行ふ者を名づけて有力の大人と爲すと、吾人必ず其大人たることを期すべきなり。

今日は火曜であります。火は物を燒くを本分といたして居りますから油斷もならぬので、どんな所に置てあつても、少しでも燃えうつるべきものがあれば燃えつき、どんな穢いものでも之れを燒いて其の惡臭紛々たるをも厭ふことはありません。人間の方では之

れを利用して汚れ物を一掃したりいたして一切を淨化するのにも用ひますし、時には又餘り遠慮なく燒き盡くすが故に迷惑することもありますが、火の方からいへば火は如何なる困難にも耐えて燒くといふ自己の本分を盡くして居るに外なりません。

火に就てわれ〳〵の學ぶ所は其の本分を盡くすべく耐え忍び行く所にあります。我等も亦我等の本分を守るに至つては火の其の燒くに當つては物の美醜を問はざるが如く、巧言令辭を以て誘惑せらるゝとも少しも之れを曲げず、如何なる逆境に遇ひましても之れを耐え忍んで其のために節を變じたり、氣を挫いたりしてはならないので、佛敎には之れを忍辱と申します、辱ははづかしめで之れを忍ぶの意義であります。一體辱めるといふものは外から來るので其の爲めに自分が動かされるから腹が立つので、辱の爲めに腹を立てるのは自分が却つて向ふに負けるやうなものであります、チツト自分が耐えて居れば、向ふは却つて引退くものであります。古歌に

こりずまに打ちは寄せても岩が根に
おのれくだけてかへる仇浪

といふのがあります。谷川の小石は他人の毀譽褒貶に押し流されるやうに激流に押し流されて其の圭角が次第にとれて海岸へ出る頃には磯の小石となつてしまひますが、大きな岩は打ち寄する仇浪に少しも動かされませんから、浪の方が却て碎けて行くやうなものでありますから心を大きくして此辱めに忍ぶのでなければ決して充分に自分を盡くすことは出來ませんが、此忍といふことがなか〳〵むつかしいので、「遺敎經」には「忍の德たる持戒苦行の忍ばざる所なり」といひ、又「忍を行ふ者を名けて有力の大人と名く」とまでいはれて居ります。

忍辱の反對は瞋恚卽ち腹立ちで、此腹立ちは他によつて動かされて、自分の心の中のおれが〳〵といふ我見我慢から起るので、お經の中には「百千の敵に克つを勇者なりとせず、己れに克つを以て眞の勇者とす」とありまして、此の忍辱といふは己れに克つ眞勇者で之れほど有力な大人はないと申すべきであります。

水曜（奮勵）

今日は水曜なり、彼の諸〳〵の水の皆悉く大海に向つて流るるや滔々として滞ふることなく、如何なる山岳をも迂廻して只其目的を達せんとするを思ふべし。我等も亦如何なる障害をも排除し、幾許の困難にも克ち得て、以て人生最終の目的を達せざる可からず、佛敎に之を精進といふ、經に曰く譬へば少水の常に流れて能く石を穿つが如しと、吾人豈黽勉せざる可けんや。

今日は水曜である。彼のもろ〳〵の水、或は草の根を潜つて流るゝチョロ〳〵水も、直下數千丈、勢ひ強く落下する瀧の水も、岩を嚙み石に激する谷川の流れも、漫々として廣野を迂廻して居る大江の水も、悉く流れて海に入るので、如何なる山岳があつて之れを妨げましても廻り〳〵て其の目的を達しますやうにわれ〳〵も亦其の目的のためには如何なる障害がありましても、之れを排除して、幾多の艱難に打ち克つて自己の目的を達すべく進まねばなりません。人おの〳〵其の目的とする所がありまして或は大政治家、或は大實業家、或は大學者、或は大富豪、或は藝術の達人といふやうに分れますが、細流も江河も等しく海に入るやうに人間の最終の目的は人たるの本分を全ふして、我等の生存をして意義あらしむるのにあります。これに向つて一生懸命に進むべく奮勵努力いたしますのを佛敎では精進と申します。これには難壤精進と申しまして如何なる艱難にも破壞せられることなく進みますことと、勤勇精進とて勇氣を振つて奮勵して勤め進んで行くことと、今一つ無息精進とて少しも油斷なく、水の晝夜の別なく息むことなくして流れ行く心が必要であります。同じく「遺敎經」の中に「譬へば少水の常に流れて石を穿つが如し」とありまして、一滴二滴の雨垂れでも石を凹ます力はあります。

昔、南都に明詮といふ坊さんがありまして修行半ばにして寺を逃れ出ましたが、折柄降り來つた雨を避けるべく寺の門脇に憩ふて居りましたが、軒に落る雨垂れに石の凹んで居るのを見て、最も弱き水の力でも勉めて怠らざれば石を穿つものである。我今ま中途にして學業を廢せんとしたが此少水の石を穿つが如く、根氣よく努むれば名僧知識にも成り得ないものではないと感じて寺へ引き返し、それから黽勉努力して名僧となられたといふ話

があります。我等は此水に就て學ぶ所實に多きものあるを思はねばなりません。

木曜（靜慮）

今日は木曜なり、彼の老樹大木の能く其根幹を固めて、如何なる大風に遇ひても、枝葉の靡くに任せて、決して其本を動かすことなきを思ふべし、我等も亦豈深く其の心の本源を靜かにして如何なる境遇にも妄りに情念を動かすことなく、萬事に應じて綽々餘裕あらんことを希はざる可けんや。佛敎は之を禪定といふ、經に曰く心を一處に制すれば事として辨ぜずといふこと無しと。

今日は木曜であります。彼の何百年も經つたといはるゝ大きな木が、鬱蒼として枝葉を茂らし、根を深く地中に固めて、如何なる大風が吹いても枝や葉は風の弄ぶにまかせて西に東にと靡かせて居りますが、決して其の根を動かし幹を倒すやうなことがないやうに、われ〳〵も亦心の根を深く固めて、誘惑の風に動かぬやうにせねばならぬ、「氣に入らぬ風もあらうに柳かな」で、柳が風の吹くに任せて、しかも倒れず折れないやうに、浮世の風は、われ〳〵の心を動かし、喜怒哀樂の情念を起さしめますが、それに動かされぬやうに心の本源を靜かにして、何事に處しても、あはてず騷がず、綽々として心に餘裕があるやうにすることが何よりも必要であります。

動き易きは我等の心であります、見たり聞いたりすることで動く心を佛敎では眼、耳、鼻、舌、身の五識といひ、之れを心の入口とし、これを受け付けるのが六番目の意識で、此意識で受け付けたものを我といふ一つに纏めるのが第七番目の末那識、譯して我見識と申します。これによつて氣に入るの氣に入らぬのと心を動かすものでありますが、更に其の奥に阿賴耶識といふのがあつて之れが一切の物を收め入れるから藏識ともいひ、これよりすべての心の働きが出るから種子識ともいひ、半ば潛在的の心でありますが、更に其の奥に眞如といひ佛性といふ心の本源があるのであります。此本源を見究めることが所謂佛

性の徹見で、それには靜かに慮ることが必要であるとし、これを禪定と申します。禪は梵語で禪那、靜慮の義であります、定は心を一所に定むることであります。お經の中にも、「心を一所に制すれば事として辨ぜずといふことなし」とあります。心を一所に定めると申すのは其の本源に歸せしめて濁りなき碧潭に萬象の影の映るが如く、我が心を鏡のやうに明かにいたしますれば花來れば花が映り、鳥來れば鳥が映りますが、去つては其の影を留めぬ如く平然として萬事に應ずることが出來ますので、此心を靜めるといふことが今日のやうなスピード時代には最も必要で、此心を靜めることがなければ熟慮といふこともなく、少しの風にも吹き倒さるゝ根の固まらぬ木のやうに鼻先思案の其場限りの者や、一時の感情に走る喜怒によつて其の身を過つに至るものであります。

金曜（知識）

今日は金曜なり、彼の黃金の百寶の王たる、純眞にして雜物を交へず、長なへに其の質朽ちず、其の色變らず、之を以て諸の善根功德をも積むべく、諸の美觀も亦之に過ぎたるもの無きを思ふべし、我等も亦諸の雜念妄想を離れて其變壞せざること金剛の如く諸の善行美德を發輝すべき眞心の光明を放たざるべけんや、佛敎に之を智慧といふ經に曰く當に聞と思と修との慧を以つて、而も自ら增益すべしと。

今日は金曜であるから金に就て學べといふのであります。黃金のすべての寶の王として貴ばるゝことはいふまでもありませんが、それは純眞にして混りけのないといふことが必要であります。銅が混じて居るとか、鉛が交つて居るからといふのでは金たるの資格は減じます。何故純金がソンナに貴ばるゝのかと申しますれば、其の燦然として輝く色澤にも由りませうが、それよりも大切なのは何時まで經つても其の色の變ずることなく、其の朽ちるといふことがない永久不變といふ所にあります。それ故に通貨として最も適當なものとして文明國では何れも金本位として通貨を定めて居りますから、これを以て何物とも交換

し得る偉大な力を以て居るのでありまして、これさへあれば、どんな善い事でも出來ます

其の實用價値から申しても大變なものでありますが、これを裝飾用といたしましても燦爛

として目を眩ますの美觀を呈せしむることが出來るのであります。人間の心の働きで此黄

金に比するものは何かと申しますれば智慧であります、智慧は實に黄金の如くに萬事に通

用するのでありますし、又いろ〳〵の善行美德を積むことも出來るのでありますが、これ

に混り物がありましたり自分勝手の小才覺や、さては狡智となりましては却つて世を害し

身を傷けるものとなりますので、磨き出すべきものは雜念妄想を離れた眞の智慧でなけれ

ばなりません、此眞の智慧はどうして出來るかといへばお經の中に聞と思と修との三つが

ありまして

耳に聞き心に思ひ身を修せば

いつか菩提に入相の鐘

とも云はれまして、こゝに聞といふのは見聞を略しましたので、先輩の說を聞いたり書物

を讀んだりして外から智慧を增して行くと共に、今度は之れを自分のものとして充分に思

慮をせねばなりません。此思慮がないとたゞ學んだだけで、これが自分のものになり覺る

といふまでには參りません。然らば此思慮だけでよいかといふに、たゞ知つただけで之れ

を身に修行して知と行とが一つにならねば、まだ眞に純一無雜の眞智とは申されませんの

で、「大智度論」には知目行足といふことがありまして智慧の目と行の足と此二つが一つ

にならねば眞の智慧とは申されません。此智慧こそ燦として自分を輝かすのみならず、又

もろ〳〵の善行美德を發揮する本となるものであります。

土曜（敎化）

今日は土曜なり、彼の大地の能く萬物の母たる諸の植物鑛物

一切の動物等、皆悉く之を載持懷抱して、各〳〵其處を得て生育發達

せしむると思ふべし、我等も亦豈萬物をして各〳〵其處を得せし

め別して人類に對しては機に應じ緣に隨ひて、其身心に安慰を

得せしむることを希はざる可けんや佛敎に之を方便といふ經に曰く醫の善く方便して狂子を治するが如く、毎に自ら是の念を作せ、何を以つてか衆上をして無上道に入り、速かに佛身を成就することを得せしめんと、吾人の心行こゝに至りて始めて以て人生最終の目的を達することを得たりと謂ふべきなり。

今日は土曜であります。土は實に萬物の母と申すべきで、もろ〳〵の植物は根を此土の中に埋めて生々發育して居るのでありますし、一切の動物は此土の上に若くは此土で圍まれたる水の中に棲息し、此土によつて育てられたるものによつて生活して居りますので、此土を以て包まれたる大地の上に載せ持たれて居らぬものはなく、一切の鑛物は悉く此土の中に懷抱せられて居るので、植物は植物、動物は動物、鑛物は鑛物と、おの〳〵其の處を得て土によつて生き育つて居るのであります。

此土によつて何を學ぶべきかといふに「我等も亦豈に萬物をして各々其の處を得せしめ、別して人類に對しては機に應じ緣に隨ひて其の身心に安慰を得せしむることを希はざるべけんや」とありまして、土がおの〳〵異れる萬物を載持懷抱せる如く人に對しても、人の心はさま〴〵であり、其の境遇も異るのであるが、能く其の人に應じ、所謂臨機應變に敎へ導き以て安心をなさしむるやうにせねばならぬと、これを化他の方面に取つて佛敎に之れを方便といふと示されたのであります。方便といひますと「虛僞も方便」なぞといふ諺もありまして眞面目なことでないやうに考へられますが、それは大きな誤解で、方便といふのは人を敎へ人を救ふの方法手段とも申すべきことで、お經の中に「醫の能く方便して狂子を治するが如く」とありますやうに狂人を治すのに普通人のやうな取扱ひをして病氣を治す所か、醫者と病人との大喧嘩が始ります。卽ち良醫の方便は應病與藥で、病に應じて藥を與へます、此方便なくどんな病氣でも一つの藥を與へるといふやうなのを「摩訶止觀」といふ本に「野巫の一藥を以て萬物を治せんとするが如し」とありまして、野巫醫者といふ語はこれから出て終に「藪醫者」とか「竹の子醫者」とかいふ俗語も出來たのでせう、それは兎に角に我等が人を敎へ導くには此應病與藥の心得がなければなりません。

教へるの導くのといふと大變偉がるやうですが決してさうではありません、われ〳〵の世の中は互に持ちつ持たれつで、經濟生活の上からいへば互に何等かの意味での生産者となり消費者となつて、生産ばかりで消費のない人はなく、消費ばかりで生産のない人もないのが平常であるやうに、精神的には互に教へつ、教へられつして居りますので「人の振り見て我が振りを直す」のは他に教へられて居るのでありますが、我が一擧一動も亦直接間接に人を教へることとなりますので、互に他の手本となり、皆な人が一所に此世の中を善くしようといふ理想に進まねばならぬことを示されたのであります、こゝに無上道とある理想への進路、佛身とあるのは人格の完成と一應解し置いて差支はないと思ふのです。

結辭

強て七波羅密を七曜に配せんとせられたので多少の無理もないではありませんが、もと〳〵之れを以て應機接物の方便とせられましたので、單に日曜だ月曜だといふことなく之れに親て自己反省の料を得せしめんとせられた大内青巒先生の老婆親切を、更に通俗にお話し申し上げたのでありますが、此一週教訓の歸する所は智仁勇三德の修養で、之れに敵するものは智には愚痴、仁には慳貪、勇には瞋恚で、これを貪瞋痴の三毒と申します。此三毒を破つて三德を發揮せしめんとするに外ならないのでありますから、此點を玩味せらるゝ時、此婆說の上の婆說も亦無用でなからうと思ふのであります。

いくたびか思ひ定めて變るらん
　頼むまじきは我が心なり　　最明寺時頼

いつはりのなき世なりせばいかばかり
　ひとの言の葉嬉しからまし　　古歌

一、家業出精、一、知足、一、儉約、一、堪忍、一、身養生、以上五味はいつにても正直を離さず加へて片時も忘れず服用あらば身も家も安全にして子孫永々安樂なるべし。而して禁物は、一、不實、一、剛欲、一、酒色、一、朝寢、一、家内不和合、此の五品は假りにも喰ひ合すべからず、家を收むるの大毒物なり、猶ほ恐るべし、ありていにするが安樂傳授にてかくすにまさる苦みはなし。

――安樂傳授「養生補藥」――

感興十二ケ月

感興十二月

觸目是春光（一月）

新衣を裁し、新裝を凝らして、玆に新年を迎ふ。色身舊の如しと雖も、心、自から新なるを覺ゆ。心自ら新たにして天地に接せば、昨日に變らぬ山容水態も、何となく春めきて、霞こめたる野邊に、早や若草の萠え出で、軒の梅が枝も、今日は蕾の殊にふくやかなるを感ず。境、心を轉じ、心、境を轉ず。修養の要は此の回心の處にあり。若し聖賢の書、外より我を轉じ、心裏の靈光、內より我を照さば、舊夢跡なくして、新なる醒覺、此に熟せん。新衣なく、新裝なくとも、心に此の新生命を得れば觸目、悉く之れ春光。瑞靄、頭上にたなびき、祥氣、脚下に生じ、「霞たち梅のかほりも、まさり行く、む月の空ぞ、うれしかりける」古歌の意を體現せん。

○

一月を正月と呼ぶのは、王者が正に居ると云ふ意味である。支那では堯舜の時代から既に正月と稱したらしい。日本で睦月と呼ぶのは貴賤上下を問はず、往き交ひて睦み合ふ故である。英語の January と云ふは、羅馬の神 Janus がすべての物の始めを司ると云ふ意味から一年中の月の名の最初に冠した譯ださうだ。

心地の究明（二月）

春風一夜、南枝に訪れ、梅蕾、今朝既に笑を含む。曾て之れ霜に蟄し、雪に伏せしもの、霜の之れを虐げ、雪之れを苦むるとも、本來の春光は機を得て迸發す。吾等の心裡に亦此の春光あり。永く浮世の風に荒され、久しく塵俗に苦めらるゝとも、深く潜める靈覺の、いつかは花を開かざるべき。華藏の世界、滿目の春光、豈に心華開發の機たらざらむ。究めよ、深く、究めて其奥底に至れば、蕾を破つて馥郁の香を放つ、白葩黄蕋なからんや。

○

二月を衣更著と呼ぶのは、餘寒のために更に衣服を加へると云ふ説もあるが、木や草の發月であるからとの説もある。英語の February と云ふのは、羅甸語の Februarius（淨めの月と云ふ意味）からとつたので、往昔この中旬に罪を祓ふ祭を行つたものださうである。

花信（三月）

春色漸く闌ならんとして、花信早や遊子の心をそゝる。山村尚ほ梅の咲き殘れるに、水郭既に挑の艶やかなるあり、麥隴菜圃に蝶の訪れて、陽炎たつ野邊に雲雀の囀れる、いづれか春の眺めならざる。見よ、前庭の海棠の笑を含み、後園の梨花、露を帶びたるを。況んや。一夜の紅雨、千枝の梢を染めて、萬重の烟は霞となつて野に山に、詩人得意の天を描き出さんとするをや。

○

三月を彌生と呼ぶのは草木がいよ〳〵成長する月との意味である。英語の March と云ふのは羅馬

の神の Mlars と云ふのからとつたのである。

大聖の出現（四月）

百花妍を競ふ候四月、風清き藍毘尼の花の園生に放たれし呱々の聲は、人類至上の權威を喝破せられし唯我獨尊の叫びにして、花摘む御手の下より生れたまひし悉達太子の一代は、徹底的なる愛の顯現にして、五十年の横説竪説は衆生濟度の福音なり。權威は香なり、慈愛は花なり。此の花開いて人類初めて救はれ。此の香高くして衆生こゝに崇敬の中心を得。四月八日は吉日よ。大聖此の日に出現し、人類此の日に救はる。一華開いて萬國春なり。

○

四月を卯月と呼ぶのは、丁度卯の花の盛りなる頃（勿論陰暦四月也以下これに倣ふ）故、卯の花月を略して呼んだのである。英語の April と云ふのは羅甸語の Aprilis（開くの意あり）と云ふ語から來たので、春になつて花などが開くと云ふ意味から名づけたのである。

春を惜む（五月）

三春の行樂、夢の如くに過ぎ、衰紅、地に委して、燕子泥を銜む。陽炎たちし野邊も、今は芳草に彩られ、霞こめし山も、濃き淡き翠につゝまれて、天地一新、僅に春の名殘を流鶯の聲にとゞめ、杜鵑は既に夏の訪を報じ、水は殘花を送り、烟は碧樹に迷うて、春既に逝く。逝くものは復た來りて、年々花開くも、歳々、人同じからず。去年も今年も、春は昔に異らねど、青春、一たび過ぎては、人復た昔の心なく、曾て燃えし情趣の次第に薄れ行きて追懐の涙のみ年毎にかはり行くぞ悲しき。

○

五月を「さつき」と呼ぶのは、田に苗を作る頃であるから早苗月を略して呼んだのである。英語の May と云ふのは羅甸語の Maius と云ふ語から來たので、羅馬ではこの月の一日に女神 Mais の祭をするからであるさうだ。

初夏の田園（六月）

春の眺めは都ぞふさはしき。柳櫻をこきまぜて錦織りなしては人か花かを疑はしむ。されど千紫謝し萬紅逝きて、滿眸唯だ翠なる初夏の光景は鄙こそ却て興深くぞ思はれる。歌おもしろく早苗とる小田の淡きに連りて小高き森の影濃きは、實に千林の嫩葉、萬頃の青芋、天地を淨化し、乾坤を一新したるの感あり。氣晴れては、狂蝶青葉若葉の日の光に戯れ雨烟りては小田の水増して蛙の聲の流れ行く。いづれか詩囊に入らざるべき。濃艶の春は、之れを都に求むべきも、初夏の清鮮は之れを田園の有たらしめざるべからず。

○

六月を水無月と呼ぶのは、暑烈しくして、河の水の涸れるとの意味からである。英語の June と云ふのは羅馬の人民が天の王女として常に Juno と呼ぶ神を拜するより來たのださうだ。

水の一生（七月）

點滴集つて木の葉の下を潜り、更に集つて谷の小川となり、岩根を洗ひつゝ流れ流れて千仞の絶壁に至るや。道なきに道を造り、懸崖に手を撒して瀑然として倒に下り、素絹長く垂れて飛沫雪の如く、盤石を穿つて深潭と爲し、更に道を造りて山脚を走り、石に激し岩を嚙み矢の如きの急流下り下りて山盡くるの頃には水漸く多く、流れ漸く寛にして稻田菜圃を養ひ、柳烟籠むる村々を過ぎて上流水石奮鬪の際に齎らせる土砂を沈澱堆積せしめて隨所に沙洲渚汀を造り、白蘋紅蓼其の間を彩り、帶の如き本流は欸乃の聲のどかに浩蕩として海に入る、水の一生こそ、我等が奮鬪の好模範にあらずや。

○

七月を文月と呼ぶのは、草木の實が熟して、五穀も穗を含むと云ふ意味から穗含月を略して「ふみづき」と呼ぶのであるさうだ。英語の July と云ふのは、ヂュリアス、シーザアがこの月に生れたと云ふ處から、その名を月の名に呼んだのである。

心頭の涼味（八月）

打水したる庭の面に箒の跡鮮かに、樹陰の青苔色濃かにして一塵を止めず。軒の菘の風につれて露、珠と散る處、境、涼しくして氣も亦爽かなるが如く、心に群慮の蟠まるなく、雜念一掃、塵勞痕を絶てば、觸目これ山色、入耳これ谿聲、心頭一掬の涼味は直に我を驅つて清涼の境に入らしめむ。又何ぞ殊更に山に攀ぢ水に趨るの煩を要せむや。

○

八月を葉月と呼ぶのは、木の葉が紅葉して美觀を呈するからとの語もあるが、イヤ穗發月の略であるとの説もある。英語の August と云ふのは羅馬皇帝オーガスタス、シーザアが、この月にはいつも目出度い大勝利を得たといふので、自分の名をとつて月に名づけたわけであるさうだ。

秋聲（九月）

梧桐一葉、聲なきに落ち、天下の秋は早や草露に咽ぶ虫の音に訪れて、唧々人の腸を斷つ。「故郷に父母あり虫の聲〳〵に」、萬里郷を憶ふ豈に遊子の情のみならんや。「とゞまらぬ秋とし虫の知りてこそ、いつかなきやむ野邊のさむしさ」。虫聲絶えては秋更に深く、朝に庭樹に入りて寂寞を添へ、夕に鴻雁を送つて旅愁を深うす。若し其れ夜雨蕭條として落葉を誘はんか、孤燈の下、誰れか身の老い行くを感ぜざらむ。秋風、何の處にかある。聲を萬籟に假りて我れを戒飭す。

○

九月を長月と呼ぶのは夜がだん〳〵長くなるから名づけたと云ふ説である。英語の September と云ふのは、この月が羅馬の古い暦の七月に相當するので September 卽ち七と云ふ數に因んで呼んだのである。

燈下可親（十月）

秋既に寂びては艸の葉に置く露も冷やかに、西風、軒に訪れては垣根に唧く虫の音も哀れに、やがて消え行く虫の音、艸の色、蕭條の氣、頓に加はりて物思はしき夜のみ徒らに長し。古來秋風人を愁殺す。獨り架上我れを慰むる古人の存するあり。燈を剔て卷を繙けば夜雨却て興趣を添へ、秋聲も亦徐ろに感興を誘ひ、書中の滋味津々として殊に深きを覺

ゆ。正にこれ青燈親むべきの時。

○

十月を神無月と呼ぶのは、この月に日本全國の神々が、出雲國に集まりたまふ故に出雲以外の國々は神無月になるからだとの説もあるが、神嘗月と云つて新穀を神に奉る月である故であるとの説もある。英語の October と云ふのは羅馬の古い暦の八月に相當するので Octo 即ち八に因んで名づけたのであるさうだ。

菊花頌（十一月）

菊花の季節、菊花の宴。こゝに觀菊の御宴あり。九重の奥深き禁庭の花、芳香一段を加へ、賤が伏屋の垣根に咲ける一枝の菊も白華金蕊、千代見艸の、千代に、八千代に君が代をことほぐ。由來、菊花は　皇室の御紋章、其の科語クリサンシマスも、亦しば〳〵禁裏様御紋の轉訛ならずやと唱へらる。語源は如何にもあれ、花の日輪に似て、露の延壽を傳へらるゝは、好個、君が代をことほぐ標象にあらずや。露霜にあせぬ東洋の一孤島、今や匂ひ深くも宇内に薫徹するに至る。東籬の一枝豈に芳香世界に及ばざらんや。

○

十一月を霜月と呼ぶのは、無論霜降月の略である。英語の November と云ふのは、羅馬の古い暦の九月にあたるので Novem 即ち九に因んで名づけたのである。

歳　餘（十二月）

我れと喜憂を共にしたりし今年も亦將に暮れんとす。顧みれば憂きことのみぞ多かりけれど、尚ほしかすがに捨て難き愛着の逝く年を悼ましむる切なるものあり。「幾度か月盈ち還た月虧く、端なく花落ち復た花開く、年光未だ必らずしも一朝に改まらず、壯士爲すを休めよ歳暮の哀み」といふと雖も、去るを惜み來るを望む此の歳殘は、我等に反省と發奮との好機を與ふ。「春を待ち年を惜むも一とせの心すさびのとぢめなりけり」人生此の關門あつて常に清新の氣を養ふ。

○

十二月を師走月（シハス）と呼ぶのは年果月（トシハフルツキ）の略であると云ふ説が正しいさうだ。英語の December（デツセンバー）と云ふのは羅馬の古暦の十月に相當する處から十、即ち Decem（デツセン）に因んで呼んだのであるさうだ。

春

伊勢の海や霞をそめて出る日の潮瀬に匂ふ春のあけぼの　清水濱臣

夏

音もせでおもひに燃ゆる螢こそなくむしよりもあはれなり　源重之

秋

秋風に初かりがねぞ聞ゆなるたが玉づさをかけて來つらむ　紀友則

冬

古しへの雪の夜船ぞ思はるゝひとり友なき冬の山里　那波木庵

附錄　朝思暮想

朝思に希望あり、暮想に追懷あり、追懷によつて反省し、希望によつて躍進す。日々これ好日、歩々向上の大道を辿る、朝思に妄想なく、暮想に亂思なくんば以て終生を正しくせんか。

修養小訓

○

白樂天の繡佛偈にいふ。

善始二一念一　念々相屬　繡始二一縷一
縷々相屬　功德圓滿　相好具足

と、一縷終に錦繡を成す。一念豈に生涯を左右するの素地たらざらむや。

○

顔眞卿の書論にいふ、「獅子撮レ兎又用二全力一也」と、細事終に忽諸に付すべからず、大事に對して、人は多くの注意を拂ふ、しかも小事の終に大事たるを知らず。

○

一分の差によりて汽車に乘遲れ一日を空しく過せるものあり、僅にこれ一分時、汽車は客を待たず。機會の過ぐるは汽車よりも迅し、一分時の差、豈に一日を空過するのみに止らむや。

○

溪間の石、其小なるものは水に流され、其大なるものは依然として之れに抗し、激流却て其下を洗ふて、石は終に上流に向て轉ず、輕薄者流は世の風潮に追はれ、大丈夫兒は世をして、却て自己の地位を作らしむ。

○

來て是非を說くこれ是非の人、吾人は是非善惡以外に超越して行動せざるべからず。誤て是非の渦中に墮つ、終に浮ぶの時あるべからざるなり。

○

成功の祕訣は一忍字にあり、家康はいふ

世の大丈夫と稱せらるゝもの忍の一字を能くす、我未だ大丈夫ならずといへども、忍字を持すること久し、我が子孫、我が人爲を慕ふあらば、五典九經の外、忍の一字を守るべし。

と、これ或は後人の僞作なるべし、しかも家康の性行に鑑みて頗る興味あるを覺ゆ。

○

一燈を提げて行く、暗夜といへども、憂ふる所なし、黑闇々たる人生の行路、われは唯だ希望の燈を提げて行かむ哉。

○

書を讀む須くこれを心に讀むべし、我の心を以て書の心を解し、書の心を以て我が心を讀む、夜雨靑燈の下、靜かに讀み、靜かに思ふ、得力眞に尋常にあらざるべし、これをこれ

心讀といふ、更に靜中の工夫を動中に活躍せしめて運用自在なるを得ば心讀變じて身讀となる、心に讀む既に可なり、身に讀むに至りては最も妙なり。

○

朝來、新聞紙を手にして、其三面記事を讀む、詐僞あり、竊盜あり、殺人あり、姦淫あり、唯だ雲烟眼視し去る、しかもこれ社會の反映なり、人心の反映なり、これ何人の心の反映なるかを考量せよ、我が心は以て向上の一路を辿るべきも、翻て思へば、われにも亦此惡事醜行を敢てするの心を有するにあらずや、此心一たび轉ぜば、詐僞、竊盜、殺人、姦淫、また行ふなしといふ能はず、危險なる哉、心。一葉の新聞紙も想ふてこゝに至れば、慄然として肌に粟するを禁ずる能はず。

○

一念三千を具す、我が心、佛に通ずべく、又魔に通ずべし、以て聖賢たるべく以て盜賊たるべし。大乘止觀頌に「諸法唯一心、此心卽衆生、此心菩薩佛、生死亦是心、涅槃亦是心、一心而作二、二還無二相」といふもの是れ。

○

東京の俗、毎朝、味噌汁を吸はざるはなし、味噌汁を作る、必らず味噌を摺らざるべからず、味噌を摺る必らず摺木を要す、此摺木、摺鉢との磨擦によりて日に一厘を減ずるとせよ、舊市假りに五十萬戸とす、十戸にして一分、百戸にして一寸、千戸にして一尺、萬戸にして一丈、五十萬戸にして五十丈なり、これを間數に改むれば八十三間二尺となり、一町二十三間二尺となる。日に一町二十三間二尺の摺木を食しつゝあるなり。點滴、石を穿つ、細事の遂に大事たる概ね此類。

○

一日に一時間を節約せよ、生涯（五十年として）に二萬一千二百五十時間を節すべく、一日に三時間を節せむか、生涯に六萬三千七百五十時間、これを日に直せば二千六百五十六日にして約八年を生き延びたるに同じ。

○

熊澤蕃山、謳ふて曰く、

憂き事の尙ほ此上に積れかし
限ある身の力ためさん

と、人生は一個の戰場なり。丈夫須く此奮鬪的態度あるを要す盤根錯節我れに於て何かあらむ、これ我が試金石なり、佐久間象山の捕はれて獄中にあるや。

我れ此境を履まずんば、此省覺なし、一跌を經れば一知を長ずと、果して虛語にあらず、

と、彼れも亦丈夫兒たるを失はず。

○

人に勝つ難からず、自ら克つ最も難し、

十千の敵に對し、一夫にして之れに勝つとも、未だ自ら勝ち忍ぶの上なるに若かず（阿含經）

と、これ千古の金言なり、石平道人いふ、

何と勤めても、無我に成れぬものなり、何れも修して見て合點せらるべし、爰に一つ取りかへ物有るを以て我は少し無我に成りたりと覺ゆ、只人を能くしたい〳〵と强く思ふばかりにて我を忘れたり

と、人に接する春風の如く、而して自ら肅む秋霜の如くなるを得むか。

○

昔、後漢の郭林宗、樹下に憩ふ、時に其邊を過ぐるものあり、後肩に擔ふ所の陶器の地に落ちて壞れしを顧みずして行く、林宗これを異として問へば、已に地に落ちて壞る、顧みるとも何の要かあらむと、林宗其常人にあらざるを看破し、これを重用したりといふ、人能く千金の璧を碎くも、聲を破釜に失ふなき能はず、能く猛虎を打つも、蜂蠆に變無き能はず、これ人の情なり、或る書にいふ、

伊達政宗、太閤より賜はれる名物の茶碗を弄し、誤て膝下に落せる時、驚きて胸おどれり、さて思ふ、苟も五十四郡の太守一個の茶碗何かあらむ、さるにかゝる物の爲に心胸おどれること、淺ましさよと、遂に其茶碗を石に打つけて碎きたり、

と、英雄自ら英雄の修養あり。

○

克己の功、累積すれば、自ら何の作爲を須ひずして、行動、節に中るを得べし。己に克つ、其當初に於て困難なるものありといへども、一たび克つの習慣を作らむか、こは累積して第二の天性となり以て人格を玉成するに至らむ、修養の困難なるは其第一歩にあるのみ。

○

中村敬宇先生は近世の君子人なり、曾てエマーソン賠償論を譯し、これに序して曰く、

人の善を爲すは何の爲ぞや、世人に知られ姓名を賣るが爲なるか、曰く否なり、君主に知られ恩賞を得るが爲めなるか、曰く否なり、然らば何の爲ぞや、曰く人たるの道を盡さん爲なり、何となれば、人は常に善を爲すべき者なり、善を爲すは人の人たる當然の道なり

と、吾人の鞠躬努力するもの唯だ此道を行はむが爲めのみ、もとより何等の報酬を希ふべきにあらず、魯仲連いふ、

天下の士に貴ぶ所のものは、人の爲めに患を排し、難を釋て、而して取るなきなり、即ち取るあれば是れ商賈の事のみ。

と、達磨は曾て梁武が有所得の善根を喝破して無功德と爲しぬ。天は吾人を覆ふて其報を求めず、地は吾人を載せて其功に誇らず、人の人たるの道を行ふ、これ當然のみ、道の爲めに道を行ふべし、報酬を較量すべきにあらず。

○

河合繼之助いふ「世になくてならぬ人となるか、あつてはならぬ人となるべし」と、丈夫、世に志す須く這般の覺悟なかるべからす、其人存すれば其國重く、其人亡れば其國輕し、此くの如くにして初めて重を天下に成すべし。

○

道を云ふものは利を厭ひ、利を云ふものは道を厭ふ、此に於て道義、世と遠ざかり、世又道義を卻く、道と利、豈に斯く背反するものならむや。眞の道は眞の利に合し、眞の利は眞の道より出づ。

○

人生と相渉らざるの道義は眞の道にあらず。道義と相渉らざるの利益は眞の利にあらず、不義の利益は浮雲の如く、厭世の道義は世に用なし。

○

伯夷叔齊は古の賢人なり、ダイオゼニスは寡欲を以て稱せらる。彼等は自ら潔うするを知て、未だ他を濟ふの更らに大なるものあるを知らず、今の世、千の伯夷叔齊あり、萬のダイオゼニスあるも、さて世を濟ひ民を益するに足らず。

白隱の隻手の聲を聞かむより
兩手を打つて商ひをせよ

吾人は、こゝに活道德の活趣味の存するを想ふ。

○

「出世の道は卽ち世を渉るの中にあり、必らずしも人と絕ち以て世を遁るゝにあらず、了心の功は卽ち心を盡くすの內にあり、必らずしも欲を絕ち以て心を灰にするにはあらず」と洪自誠の云ひけるもの以て活道德の活趣味を道破せりと爲すべきか。

○

高原陸地、蓮華を生せず、卑濕淤泥、却て此花を開く、塵俗の中にあつて、しかも惑はざれば、こゝに初めて眞道德の光輝を見む。

○

眞道德の源泉を究めむとす、先づ驀直に進前するを要す、進前其源頭に至り退步却來して、こゝに自由の濶天地あり。名利の中にありて却て名利に墮せず、活人を殺盡して初めて活人を得、朱文公、此妙趣を詠じていふ、

步隨流水覓溪源　行到源頭劫惘然、
始知眞源行不到　倚筇隨處弄溟涬

と、倚筇隨處弄溟涬の境に至て、又他に瞞せられず。

○

道は鹽なり、業は食なり、食に鹽なくむば、其味美ならず、業に道なくむば、其業終に妙